第１章　序　　章

第１節　調査に至る経緯と経過

曽畑貝塚は縄文時代前期後半の曽畑式土器の標式遺跡であり，古くから研究者の間で注目されてきた貝塚である。1958年（昭和33）３月14日には，本市を代表する重要遺跡であることから市史跡に指定され現在に至っている。

本貝塚の存在は，かなり以前から学会では知られており，すでに1890年（明治23）には若林勝邦氏や寺石正路氏により曽畑貝塚に関する報告がなされている（若林1890，寺石1890）。若林氏による出土土器に関する記述では，「土器ハ縁，腹部ニ種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書ケル」と曽畑式土器を指したとみられる土器の特徴が報告されている。当時，すでに本貝塚が人為的に形成されたものと認識されていたことを知ることができる。

これまで行われた調査ならびに報告を列記すれば，明治時代に上述した若林氏，寺石氏による報告がなされ，大正時代には，1918年（大正７）に中山平次郎氏による採集資料報告（中山1918），1922年（大正11）の清野謙次氏による当時としては本格的な発掘調査（清野1924）が行われた。

昭和時代に入ると，1930年（昭和５）に小林久雄氏による発掘調査，1959年（昭和34）に実施された江坂輝彌氏を主査とする慶応大学を主体とした発掘調査が実施された。また，熊本県教育委員会による一般国道３号松橋バイパス建設に伴う1974年（昭和49）の試掘調査，1986～1987年（昭和61～62）の本

1959年発掘調査の様子（西より）

発掘調査で，貝塚に隣接する低湿地より縄文時代の貯蔵穴やイチイガシ・アラカシなどのドングリ類が入った編み物製品が出土するなど注目すべき成果が得られた（隈・江本ほか1976，江本編1988）。

その他，宇土市教育委員会が主体となり，1988年（昭和63）から1990年（平成２）にかけて曽畑貝塚の範囲確認調査や1994年（平成６）に個人住宅建築に伴う緊急発掘調査などを実施した（帆足2002，髙木・木下2002）。

これらの調査及び報告については，今回報告する1959年調査を除き，第３章でその概要を報告することにしたい。なお，これらの発掘調査の成果や曽畑式土器については，多数の関連論文や報告書などが刊行されている（付編３参照）。

なお，江坂氏は上述した発掘調査に加え，曽畑貝塚から西へ約４kmに所在する轟式土器の標式遺跡である轟貝塚（宇土市宮庄町）の発掘調査も実施している。1966年（昭和41）に江坂氏を中心とする熊日学術調査団による発掘調査では，木製コンテナ180箱（10×40×60cm），小破片まで含めると約27,000点

曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展（2001年11月）

慶応大学資料保管状況（慶応大学，2000年６月）

渡辺誠氏による調査指導（2009年３月）

菊池泰二氏による調査指導（2010年10月）

の人工遺物が出土した（藤本2008）。調査終了後，本出土品は慶応大学で保管され，曽畑貝塚調査出土品とあわせて「慶応義塾大学資料」（以下，慶応大学資料）と呼ばれてきたが，2001年（平成13）に調査図面（原図）・写真・日誌などの複写物とともに宇土市へ移管された。移管後まもなく開催された「曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展」（2001年11～12月，於：宇土市立図書館郷土資料室）では，県内外より数多くの見学者が訪れた。

さて，江坂氏らによる1959年実施の曽畑貝塚発掘調査の目的は次の点であった。曽畑式土器文化の時期を特定するとともに，石器や骨角器などの共伴遺物や狩猟採集に伴う自然遺物などの分析を通じて，曽畑式土器文化の実態を明らかにすることを目指した。調査は1959年10月28日から11月６日にかけて実施され，連日，新聞紙上を賑わせた（付編１－６参照）。本書はこの内容についてまとめた調査報告書である。

なお，付編１において未発表となっていた当該調査に関する報告を掲載し，付編２においては，曽畑貝塚や曽畑式土器を理解するうえで基本となる調査報告や論文を再録した。また，付編３において曽畑貝塚や曽畑式土器に関連する主な論考及び調査報告に関する文献一覧を掲載した。

第２節　調査の組織（敬称略，所属は当時）

－発掘調査－（昭和34年10～11月）

主　　査　江坂輝彌（慶応大学文学部）

調 査 員　笹津備洋・可兒弘明・渡辺誠（慶応大学文学部），乙益重隆（熊本女子大学），賀川光夫（別府大学文学部），渡辺直経（東京大学理学部），渡辺正気（九州大学文学部），小林久雄・坂本経堯（肥後考古学会），東光彦（熊本市立博物館），富樫卯三郎（宇土高等学校），松岡史（佐賀大学史学研究室），大給尹（仙台市図書館）

作 業 員　慶応大学学生・宇土高等学校生徒

－報告書作成－（平成20～22年度）

責 任 者　木下博信（宇土市教育長）

総　　括　山内清人（宇土市教育部長，20・21年度），髙木恭二（同，22年度）

事 務 局　髙木恭二（宇土市教育委員会文化課長，20・21年度），坂本純至（同，22年度），松下敏親（文化課長補佐兼文化財係長，20・21年度），中園静子（文化財係長，22年度），村田嘉奈子（文化財係参事，20年度），湯野良子（文化財係参事，21・22年度），村上淳子（文化財係主事，20・21年度），宮崎幸樹（同，21・22年度）

整理作業員　境美和，春川香子，山口陽子（文化課非常勤職員）

執　　筆　土野雄貴（文化課非常勤職員）

執筆・編集　藤本貴仁（文化課文化財係参事）

協力機関及び調査指導・協力者

慶応大学，日本考古学会，九州考古学会，熊本史学会，岩波書店，熊本日日新聞社，江坂輝彌（慶応大学名誉教授），渡辺誠（名古屋大学名誉教授），菊池泰二（九州大学名誉教授），渡辺一徳（熊本大学名誉教授），近森正（慶応大学名誉教授），阿部祥人（慶応大学文学部），岡村道雄・水ノ江和同（文

化庁記念物課），松井章・丸山真史（奈良文化財研究所），宮地聡一郎（九州国立博物館），島津義昭・木﨑康弘・西住欣一郎・丸山伸治・帆足俊文・池田朋生・能登原孝道・前田真由子（熊本県教育委員会），杉村彰一（日本考古学協会員），久野啓介（宇土市史編纂委員長），佐藤伸二・辻誠也・浜口俊夫・村田房夫・吉田恒（宇土市文化財保護審議会），小林明子（医療法人小林会理事長），中村五郎，倉元慎平（福岡県朝倉市役所）

引用・参考文献

江本　直編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

清野　謙次　1924「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑田貝塚」『歴史地理』43－２

隈昭志・江本直ほか　1976『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告第19集　熊本県教育委員会

髙木恭二・木下洋介　2002「曽畑遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編２　宇土市

寺石　正路　1890「九州ノ貝塚」『東京人類学雑誌』５－53　東京人類学会

中山平次郎　1918「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」『考古学雑誌』８－５　考古学会

帆足　俊文　2002「曽畑貝塚」『新宇土市史』資料編２　宇土市

藤本　貴仁　2008『轟貝塚－慶應義塾大学資料再整理報告－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集　宇土市教育委員会

若林　勝邦　1890「肥後旅行談」『東京人類学雑誌』５－49　東京人類学会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

（１）遺跡の位置（第１図）

熊本県宇土市は，熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部にかけて位置する。市域は，東西約24.8km，南北約7.6km，面積は約74.19k㎡である。宇土半島は北側に有明海，南側に不知火海（八代海）と面し，先端部に天草諸島が連なり，熊本平野と八代平野，有明海と不知火海を隔てる境界となっている。

宇土半島基部北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており，その下流域南側には緑川の支流である浜戸川（旧緑川）が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が展開し，北に熊本平野，南に八代平野をのぞむ古代から現在にいたる交通の要衝である。

曽畑貝塚は宇土市岩古曽町字曽畑に所在する。発掘調査が行われた50年程前は周辺に民家が点在し，周囲に田畑が広がる典型的な農村集落であったが，熊本市に比較的近く，国道３号線に隣接するなどの地理的条件から，現在，古くから存在する集落の周辺に新興住宅地が広がっており，宅地造成に伴い周辺の人口は年々増加傾向にある。

（２）地理的特色

宇土半島は臼杵－八代構造線（中央構造線）と，大分－熊本構造線に挟まれた地域に属しており，宇土半島基部から突端にかけて白亜系，古第三系の堆積岩がほぼ北東方向に走向している。新第三紀（鮮新世）から第四紀（更新世）の大岳，三角岳を中心とした火山活動による安山岩類や凝灰角礫岩類は，この白亜系，古第三系の堆積岩を不整合に覆っている（林2003）。

本半島の山地群は木原山（314.4m），宇土半島の主峰である大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地，三角岳火山系山地の３つに分けられ，半島に占める平野部の割合は比較的少ない。木原山は，白亜系の姫浦層群下部の雁回岩層に属し，泥岩，砂岩，砂泥岩，礫岩より構成され，その南麓に曽畑貝塚が立地する。

宇土半島基部に広がる平野は，熊本平野南部にあたり，緑川やその支流の浜戸川の堆積によって形成された沖積平野である。曽畑貝塚はこの沖積平野南東側に位置し，木原山から南側へ向かって派生する標高約８ｍの舌状台地末端部に立地する。台地末端部から南西側に約２～４ｍ低くなった低湿地の調査では，標高約2.5ｍで縄文時代の貯蔵穴群が検出されている（江本編1988）。

曽畑貝塚が位置する宇土半島基部周辺は，九州を代表する貝塚の密集地域として著名であるが，これは波穏やかで豊富な魚貝類が生息する有明海に面するという立地的な要因が大きいとみられている。

宇土半島北側に面する有明海は，九州西岸に位置する内湾で，南北約100km弱，東西約20km，面積は約1,700k㎡である。潮汐による干満の差が日本一大きいことで知られており，湾奥部では６ｍにも達する。干潮時に露出する干潟の面積は有明海全体で約250k㎡もあり，日本沿岸の内湾中最大である（弘田2003）。宇土市沿岸の干潟は，海岸から約４kmの沖合まで海底が露出し，主に砂質であるが，場所によっては泥分が多い。熊本平野から宇土半島地域にかけては約１万年前より堆積した有明粘土層と呼ばれる沖積層が形成されている。

第２節　歴史的環境

（１）曽畑貝塚周辺の遺跡（第２図）

曽畑貝塚（１）周辺は，縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている。本貝塚周辺の主な縄文時代の遺跡として，石ノ瀬遺跡（２），古保里遺跡（３），立岡遺跡（４）がある。

石ノ瀬遺跡では，道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期中葉の押型文土器が出土しており（古森2002），近くに集落の存在が想定されている。古保里遺跡では縄文時代後期の貝塚が確認されており，立岡遺跡では縄文時代早期の押型文土器が出土している。

弥生時代の遺跡として，石ノ瀬遺跡，古保里遺跡，畑中遺跡（５），山内遺跡（６），下松山遺跡（７），境目遺跡（８），善導寺遺跡（９）がある。

石ノ瀬遺跡では，弥生時代中期前半を中心とした土器が出土しており，なかでも朝鮮系無文土器が出土していることは注目される（川口・片岡ほか2001）。古保里遺跡からは中期末から後期初頭の合口甕棺墓が検出され，畑中遺跡では弥生時代中期以降の遺物が出土しており，仰臥屈葬の成人女性が埋葬された甕棺墓が検出されている（金田2002ａ，金田2002ｄ）。下松山遺跡は弥生時代後期の集落跡と考えられる（原田2002）。

境目遺跡と善導寺遺跡は切り通し状の道路を挟んで立地しているが，本来，同一台地上に形成された遺跡である。境目遺跡は，弥生時代中期前半から後期終末まで継続しており，これまでの発掘調査で住居跡は検出されていないものの多量の遺物が出土し，数基の甕棺墓が検出されている。注目すべき遺物として，石戈や鋳造鉄斧，祭祀土器とみられる赤彩を施した高坏などが出土している（富樫1969，金田2002ｂ）。一方，善導寺遺跡では，境目遺跡と同一時期以外にも前期末から中期前半にかけての土器群が比較的まとまって出土していることは注目される（金田2002ｃ）。遺跡の内容から，両遺跡は弥生時代の宇土半島基部地域における拠点的集落であった可能性が高い。

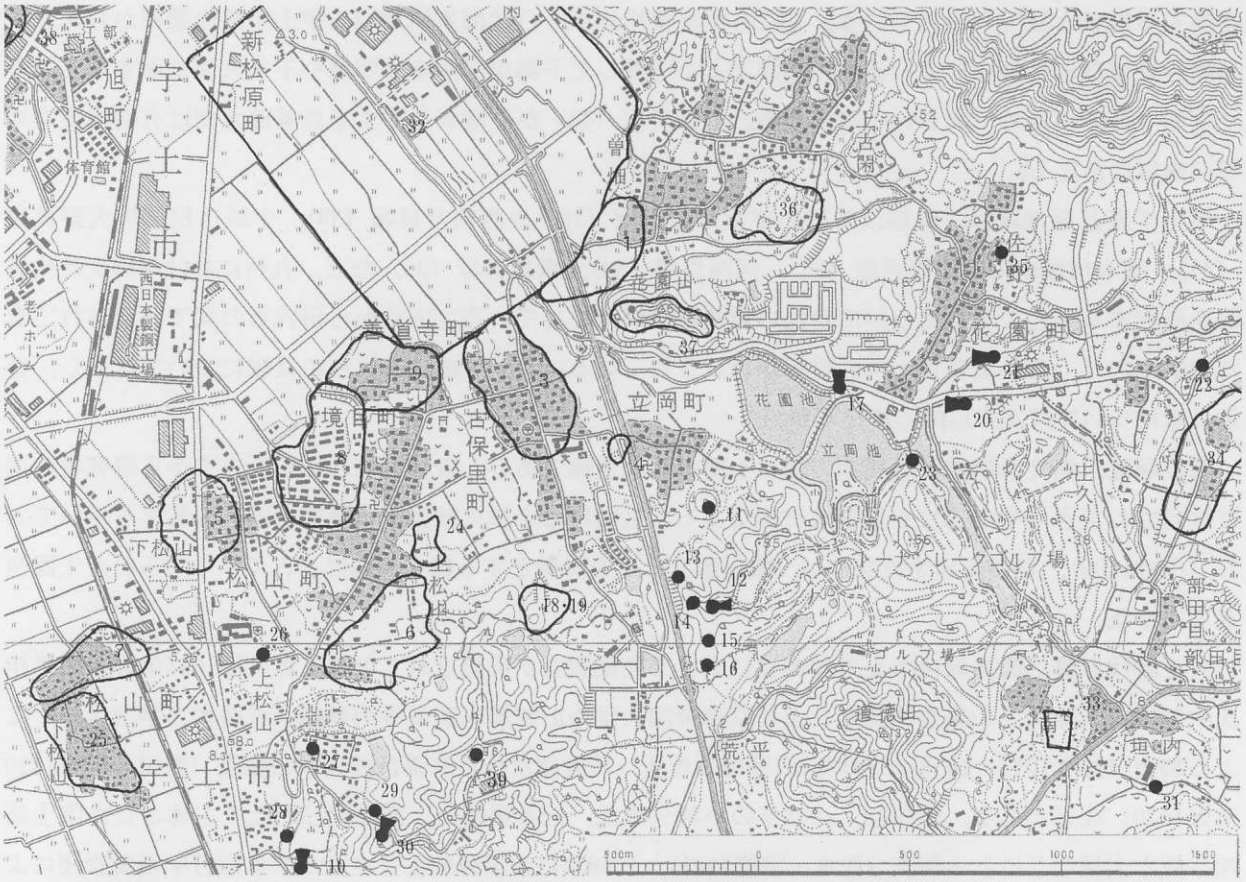
続く古墳時代の宇土半島基部地域は，県下で最も早く首長系譜が形成された地域で，前期の前方後円墳があいついで築造された。当時，宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと推測される。

このうち，向野田古墳（10）は前期後半に築造された墳長約86ｍの前方後円墳で，阿蘇溶結凝灰岩製の石棺に納められた遺存状態が良好な30代後半から40代の女性人骨が発見された（富樫1978）。副葬品は，銅鏡，鉄刀，鉄剣，碧玉製車輪石，翡翠製勾玉などがあり，その内容や遺存状況が極めて良好であることから，出土品は国重要文化財に指定されている。また，６基の古墳から構成される立岡古墳群（11～16）のうち，墳長約39ｍの前方後円墳・潤野３号墳（12）では，中心主体部で粘土槨が検出され，出土土師器から４世紀中頃に築造されたと推定される（高木・木下・元松1992）。また，中期には後円部に刳抜式舟形石棺や組合せ式家形石棺など４基の埋葬施設が存在する墳長約46ｍの前方後円墳・楢崎古墳（17）が築造された（高木・木下・元松1986）。

その他の古墳として，２基の古墳で構成される神ノ山古墳群（18・19），ともに後期の前方後円墳である女夫塚古墳（男塚）や女夫塚古墳（女塚）（20・21），横穴式石室を主体部とする円墳・三日鬼の岩屋古墳（22），円筒埴輪が出土した山下古墳（23）など，曽畑貝塚周辺には数多くの古墳が分布している（高木2002，古城2002ａ，高木・木下1985，古城2002ｂ）。なお，古保里遺跡や境目遺跡では箱式石棺群，上松山遺跡（24）では方形周溝墓群が検出されている（武末・高木・木下2001）。

古墳時代の集落については，境目遺跡，善導寺遺跡があり，上述した上松山遺跡でも方形周溝墓群が

第１図　曽畑貝塚の位置（1/600,000）



1 曽畑貝塚	2 石ノ瀬遺跡	3 古保里遺跡	4 立岡遺跡	5 畑中遺跡	6 山内遺跡
7 下松山遺跡	8 境目遺跡	9 善導寺遺跡	10 向野田古墳	11 晩免古墳	12 潤野３号墳
13 潤野古墳	14 潤野２号墳	15 西潤野古墳	16 西潤野２号墳	17 楢崎古墳	18 神ノ山１号墳
19 神ノ山２号墳	20 女夫塚古墳（男塚）	21 女夫塚古墳（女塚）	22 三日鬼の岩屋古墳	23 山下古墳	24 上松山遺跡
25 北園遺跡	26 桶底古墳	27 チャン山古墳	28 向野田石蓋土壙	29 南山内箱式石棺群	30 御手洗古墳
31 池尾古墳	32 条里跡	33 古保山廃寺跡	34 三日如来寺跡	35 安国寺跡	36 前田遺跡
37 花園山城跡	38 石ノ瀬城跡	39 高城跡			

第２図　曽畑貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000）

形成される以前の竪穴住居跡が検出されている。

古代には境目遺跡や善導寺遺跡，上松山遺跡から土師器や須恵器などの豊富な遺物が出土しており（網田2002ａ，網田2002ｂ），なかでも注目されるのは，境目遺跡出土の瑪瑙製鋳具（丸鞆）や善導寺遺跡出土の硯に転用された須恵器蓋がある。これらの遺跡は旧宇土郡の中心的な集落跡と考えられ，北側には条里跡（32）に推定されている低湿地が広がっている。

中世の遺跡としては，曹洞宗開祖・道元の直弟子である寒厳義尹が1269年（文永６）に開いた三日如来寺跡（34）があり，瓦や塼，土師質土器などが出土している。境目遺跡では，14世紀代とみられる道路状遺構が検出され，青磁や白磁などが出土している（藤本2001）。また，肥後国安国寺跡（35）は天台宗寺院であった佐野寺の寺号を改めたものである。その他，中世の想定古道である岩熊古道（仮称）が条里跡東側に南北方向にのびており，本古道を見下ろす丘陵上に花園山城跡（37）が所在する。

近世では，キリシタン大名・小西行長が近世宇土城や城下の防御を目的に築城したと想定される石ノ瀬城跡（38）があり，発掘調査で空堀跡が検出され，景徳鎮窯系や漳州窯系の染付が出土している。また，宇土半島周辺地域で最大級の灌漑池である立岡池や花園池が築造された。

（２）宇土半島基部周辺地域における縄文時代の貝塚について（第３・４図）

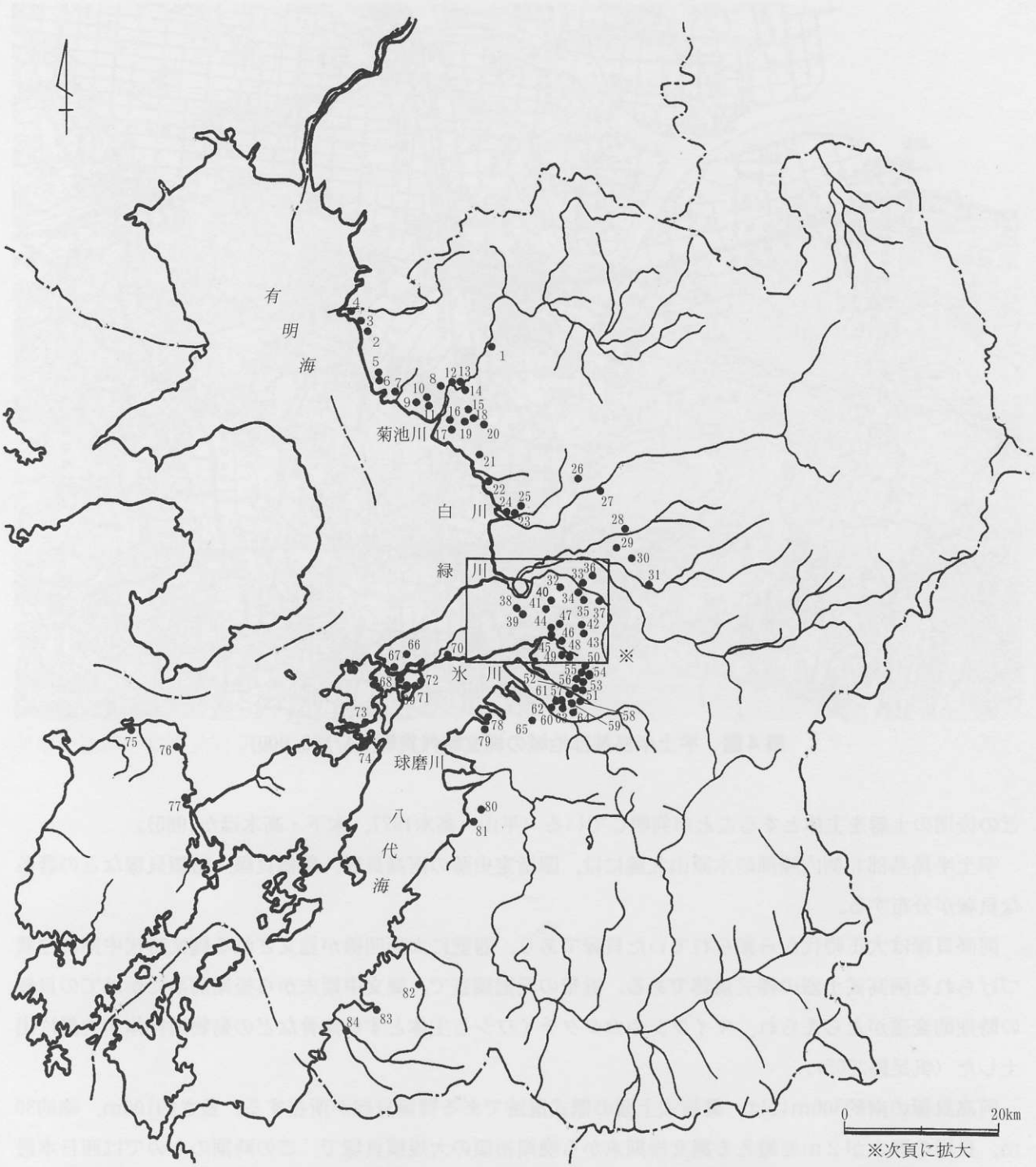
熊本県では84ヶ所の縄文時代の貝塚が確認されており（池田2001，帆足編2005），西日本有数の貝塚が密集する地域として知られている。主に有明海東岸地域，八代海東岸地域，宇土半島先端部から天草上島周辺地域などに集中しているが，遠浅でよく発達した干潟が広がる有明海や不知火海に面するという地理的な要素が極めて大きいとみられる。曽畑貝塚（40）が位置する宇土半島基部北側は有明海東岸地域の南境にあたる。

宇土半島基部地域は，曽畑以外にも宇土市轟貝塚（38）や西岡台貝塚（39），宇城市松橋町大野貝塚（44），熊本市城南町の黒橋貝塚（33），阿高貝塚（34），御領貝塚（35）など，九州における縄文時代貝塚を研究するうえで欠くことができない重要遺跡が点在している。古くから研究者の間で注目されてきた地域であり，これまで18ヶ所の貝塚が確認されている。以下では，これらの貝塚について概観し，曽畑貝塚については次章以降で詳述する。

轟貝塚は，縄文早期末から前期の轟式土器の標式遺跡であり，曽畑貝塚とならび古くから研究者の間で注目されてきた学史的にも重要な貝塚である。戦前には小林久雄氏が「轟式土器」の名称を用いており（小林1935），貝殻条痕を地文とし，隆起線文などを特徴とする轟式土器は，古くから知られた土器型式であった。

大正時代以降，轟貝塚は多くの研究者によって発掘調査が実施されており，古くは1917年の濱田耕作氏や鈴木文太郎氏，山崎春雄氏らによる京都帝国大学や旧制熊本医学専門学校（現熊本大学医学部）による調査（鈴木1917・1918），1919年の濱田耕作氏，清野謙次氏ら京都帝国大学の調査（濱田・榊原1920、清野1920）などがある。戦後は，1958年の小林久雄氏，松本雅明氏，富樫卯三郎氏を主体とした宇土高校や熊本大学などによる調査（松本・富樫1961），1966年に江坂輝彌氏を主査とする熊日学術調査団による調査が実施された（江坂1971，藤本2008）。これらの調査によって轟式をはじめとする縄文土器や貝製品，石器，漁具，骨角器等，多種多様な遺物が出土した（池田2002）。

轟貝塚中心部から東約100ｍに位置する西岡台貝塚では，発掘調査により貝層が２つに大別されることが明らかとなり，下層が轟・曽畑式土器などの前期の土器を主体とし，上層は出水式や北久根山式な



1 若園貝塚	2 宮内貝塚	3 境崎貝塚	4 四山貝塚	5 堀崎貝塚Ａ	6 堀崎貝塚Ｂ
7 腹赤貝塚	8 尾崎貝塚	9 浜田貝塚	10 庄司（貝島）貝塚	11 古閑原貝塚	12 繁根木貝塚
13 保田木貝塚	14 桃田貝塚	15 片諏訪貝塚	16 ビナワラ貝塚	17 キャアガラワラ貝塚	18 竹崎貝塚
19 久島貝塚	20 尾田貝塚	21 湯の浦貝塚	22 中川内平（平）貝塚	23 北内潟貝塚（参考地）	24 千金甲菖蒲谷貝塚
25 川戸貝塚	26 打越貝塚	27 渡鹿貝塚	28 沼山津貝塚	29 カキワラ貝塚	30 甘木貝塚
31 辺田見貝塚	32 ソビエ石貝塚	33 黒橋貝塚	34 阿高貝塚	35 御領貝塚	36 今村貝塚
37 敷田貝塚	38 轟貝塚	39 西岡台貝塚	**40 曽畑貝塚**	41 古保里貝塚	42 北萩尾貝塚Ａ
43 北萩尾貝塚Ｂ	44 松橋大野貝塚	45 松橋貝塚	46 上久具貝塚	47 曲野貝塚	48 仲間貝塚
49 宮島貝塚	50 年の神貝塚	51 瀬戸貝塚	52 七ツ江カキワラ貝塚	53 竹ノ下貝塚	54 中小野貝塚
55 引地貝塚	56 大坪貝塚	57 四ツ江貝塚	58 土穴瀬貝塚	59 段貝塚	60 大野貝塚
61 赤迫Ａ貝塚	62 赤迫Ｂ貝塚	63 西平貝塚	64 大瀬田貝塚	65 有佐貝塚	66 州の上貝塚
67 際崎貝塚	68 小崎貝塚	69 辺田貝塚	70 西木の浦貝塚	71 道の峯貝塚	72 浜の州貝塚
73 柳貝塚	74 前島貝塚	75 沖ノ原貝塚	76 一尾貝塚	77 大矢貝塚	78 産島貝塚
79 郡築十二番町遺跡	80 五反田貝塚	81 田ノ川内貝塚	82 橋本貝塚	83 浜崎貝塚	84 南福寺貝塚

第３図　熊本県縄文時代貝塚分布図（1/800,000）

第４図　宇土半島基部地域の縄文時代貝塚（1/100,000）

どの後期の土器を主体とすることが判明している（平山・髙木1977，木下・髙木ほか1985）。

宇土半島基部北側内陸部の木原山北麓には，国指定史跡の阿高貝塚，黒橋貝塚，御領貝塚などの著名な貝塚が分布する。

阿高貝塚は大正時代から知られていた貝塚であり，器壁に太形凹線が施文される縄文時代中期に位置づけられる阿高式土器の標式遺跡である。近年の発掘調査で，縄文中期末から後期前半にかけての貝層の時期的変遷がとらえられ，マイワシやカタクチイワシを主体とする魚骨などの動物遺存体が大量に出土した（帆足編2005）。

阿高貝塚の南約300mには，御領式土器の標式遺跡である御領貝塚が所在する。長さ約100m，幅約30m，貝層の厚さが２mを越える縄文後期末から晩期初頭の大規模貝塚で，この時期のものでは西日本最大級である。貝層より磨製・打製石器，石鏃，貝輪，土偶などが出土している。

小林久雄氏は，阿高貝塚と御領貝塚の形成時期について，鹹水産のマガキを主体とする阿高貝塚と，淡水産のヤマトシジミが主体の御領貝塚を，海進海退現象による環境変化によるものと指摘し，阿高式土器と御領式土器の相対的な時期差を明らかにした（小林1931）。

1988～1991年度に実施された黒橋貝塚（縄文中期から後期）の発掘調査では，土壙が73基検出され，縄文時代中・後期の土器の変遷を明らかにするうえで貴重な資料が出土するとともに，石器や骨角器，貝製品，獣骨や魚骨，ドングリが大量に出土した（髙木・村崎編1998）。

以上，宇土半島基部周辺地域だけでも縄文時代早期末から前期の轟式土器，同前期の曽畑式土器，中期の阿高式土器，後期の御領式土器が標式土器として型式設定されており，学史的にも遺跡の内容から

みても，九州の縄文文化を知るうえで重要な貝塚が分布する地域といって差し支えないだろう。これらの貝塚以外でも，鳥居龍造氏や清野謙次氏が調査を行った宇城市松橋町松橋大野貝塚や，曽畑式土器出土層の下層から轟式土器が出土した同宮島貝塚などが所在している。

宇土半島基部北側にあたる熊本平野周辺部では，曽畑式土器が出土した上益城郡嘉島町カキワラ貝塚（乙益1959）や，阿高式土器が出土した熊本市渡鹿貝塚（富田1996）など10ヶ所の貝塚が確認されている。宇土半島基部南側の氷川が貫流する八代平野北部では，西平式土器の標式遺跡である八代郡氷川町西平貝塚（今田2002），1879年（明治12）にE.W.モースによって発掘調査が行われた同大野貝塚や，中・後期の貝塚である八代市鏡町有佐貝塚など16ヶ所の貝塚が分布する。

このように熊本平野から宇土半島基部地域，八代平野北部にかけて実に県内の５割強の貝塚が分布しており，九州でも特に多くの貝塚が形成された地域であることがわかる。さらに，学史的・学術的にも貴重な貝塚が多数含まれていることは，九州及び西日本の縄文研究を進めるうえで極めて重要な地域であることを示しているといえよう。

引用・参考文献

網田　龍生　2002ａ「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

網田　龍生　2002ｂ「善導寺遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

江坂　輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会

池田　朋生　2001「熊本県の貝塚の様相」『九州の貝塚』九州縄文研究会・肥後考古学会

池田　朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

今田　治代　2002「西平貝塚」『竜北町遺跡地図－竜北町遺跡詳細分布調査－』竜北町文化財調査報告第２集　竜北町教育委員会

江本　直編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

小田　文弘　2003「宇土半島と宇土市」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市

乙益　重隆　1959「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」『日本考古学年報』第８号　日本考古学協会

金田　一精　2002ａ「古保里遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

金田　一精　2002ｂ「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

金田　一精　2002ｃ「善導寺遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

金田　一精　2002ｄ「畑中遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

川口雅之・片岡宏二ほか　2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第９巻　宇土市教育委員会

木下洋介・髙木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集　宇土市教育委員会

清野　謙次　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

小林　久雄　1931「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』７－３～８　熊本地歴研究会

小林　久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号　東京考古学会

坂本　経堯　1983『肥後上代資料集成』　肥後上代文化研究会

鈴木文太郎　1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊

鈴木文太郎　1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第３号

髙木　恭二　2002「神ノ山１号墳」『新宇土市史』資料編２　宇土市

髙木恭二・木下洋介　1985『女夫塚古墳（女塚）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集　宇土市教育委員会

髙木恭二・木下洋介・元松茂樹　1992『立岡古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集　宇土市教育委員会

髙木恭二・木下洋介・元松茂樹　1986『ヤンボシ塚古墳・楢崎古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集　宇土市教育委員会

髙木正文・村崎孝宏編　1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集　熊本県教育委員会
武末純一・髙木恭二・木下洋介　2001「上松山遺跡」『新宇土市史基礎資料』第９集　宇土市教育委員会
富樫卯三郎　1969『境目西原遺跡』熊本県宇土市境目西原遺跡調査概報　宇土市教育委員会
富樫卯三郎　1978『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第２集　宇土市教育委員会
富田　紘一　1996「渡鹿貝塚」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　熊本市
林　　行敏　2003「宇土半島の地質」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
濱田耕作・榊原政職　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
原田　範昭　2002「下松山遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古城　史雄　2002ａ「神ノ山２号墳」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古城　史雄　2002ｂ「三日鬼の岩屋古墳」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古森　政次　2002「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
帆足　俊文　2002「曽畑貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
帆足俊文編　2005『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第223集　熊本県教育委員会
平山修一・髙木恭二　1977「轟貝塚（西岡台地区）の調査」『宇土城跡（西岡台）－本文編－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集　宇土市教育委員会
弘田禮一郎　2003「有明海の自然」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
藤本　貴仁　2001『境目遺跡－第７次調査－』　宇土市教育委員会
藤本　貴仁　2008『轟貝塚－慶應義塾大学資料再整理報告－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集　宇土市教育委員会
古森政次・金田一精　2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
松本雅明・小林久雄ほか　1965『城南町史』　城南町史編纂会
松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会

第３章　曽畑貝塚における過去の調査について

第１節　曽畑貝塚の調査概要

曽畑貝塚の調査の歴史は古く，1890年（明治23）には若林勝邦氏や寺石正路氏の表面採集資料の報告，1923年（大正12）には清野謙次氏による発掘調査が行われている。その後，1959年（昭和34）に慶応大学を中心とした調査団，1986・1987年（昭和61・62）に熊本県教育委員会などによる発掘調査が実施された。

これまでの調査の結果，貝塚の範囲は南北140m，東西40m程度と推定されており，縄文早期から後期の土器片，磨製石斧や石匙などの石器，貝輪などの装飾品，網代などが出土し，県教育委員会が実施した曽畑貝塚西側の低湿地の調査では，62基にのぼるイチイガシを主体とするドングリ類の貯蔵穴群が検出された。また，縄文時代以外にも古墳時代の土壙墓や土師器が出土している。

以下，これまで実施された明治期から平成期までの調査概要について報告する。

第２節　明治期の調査（第５図）

（１）明治期の調査について

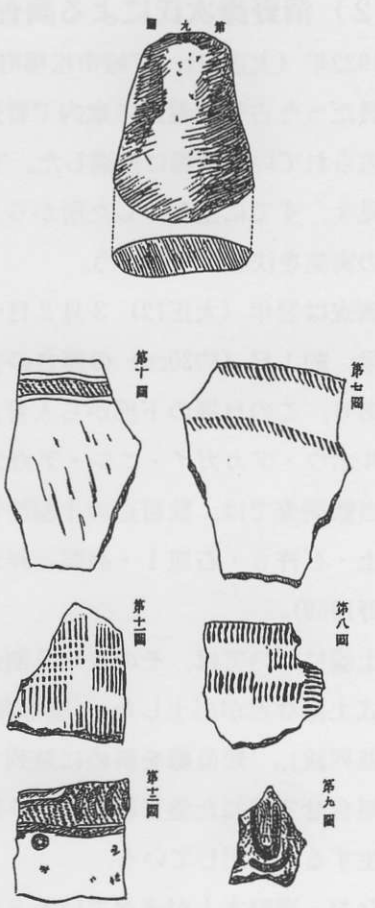
若林勝邦氏，寺石正路氏による調査があり，若林氏による1890年発表の「肥後旅行談」や「肥後ニオケル石器時代ノ遺跡調査報告」，寺石氏による「九州ノ貝塚」として報告された（若林1890ａ・1890ｂ，寺石1890）。

（２）若林勝邦氏及び寺石正路氏による調査

若林報告（若林1890ａ・1890ｂ）によれば，曽畑貝塚について「面積凡ソ七畝（約700㎡）貝殻堆積ス厚サ凡ソ三尺（約90㎝）トス昔時ハ数町ニ渉リシモ田畠開拓ノ為消滅シ現今ノ広サニ縮小」，「貝殻ハ皆鹹水産」，「土器ニハ種々ノ飾紋アル」など，貝塚の特徴を詳細な観察に基づいて記述している。

遺物については，縄文土器や磨製石斧，獣骨，貝殻などの表採資料を報告し，挿図より曽畑式土器と後期の磨消縄文土器とみられる縄文土器を表採したことがわかる。後者のうち１点は赤色顔料が塗布されていたという。

なかでも注目されるのは，「土器ハ縁，腹部ニ種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書ケル斜線アリ」と曽畑式土器の文様の特徴を記述していること，さらに「通例貝塚ヨリ出ルコト少キ一種ノ土器ナリ余輩ノ毎ニ称スル朝鮮土器ノ類ナリ」と曽畑貝塚から出土する土器（曽畑式土器）と櫛目文土器のことを指したとみられる朝鮮半島の土器との類似性



第５図　若林勝邦氏採集遺物
（若林1890ｂ）

を指摘した。

寺石氏も，縄文土器や磨製石斧，獣骨，貝殻などが出土したことを報告したが，報文中に曽畑式土器とみられる土器を指したとみられる「朝鮮土器破片」との記述があることは注目される（寺石1890）。このように，若林氏，寺石氏の両者は，曽畑式土器と朝鮮系櫛目文土器との類似性をすでに明治期の段階で示唆している点は特筆すべきである。

このうち，若林氏がまとめた「肥後旅行談」については，曽畑貝塚を学会に初めて紹介したものとして学史的にも重要なため，付編２において再録した。

第３節　大正期の調査（第６図）

（１）中山平次郎氏による調査

中山平次郎氏は表採資料を土器の文様から分類し，その特徴を報告した（中山1918）。記述内容や掲載図版から判断すれば，中山氏は轟式土器や曽畑式土器，阿高式土器，鐘崎式土器などを採集したと判断できる。表採資料のうち最も多いものは，「篦書の横又は斜なる平行線文様を示すもの」として曽畑式土器の詳細を紹介した。その他，曽畑式土器に該当するものとして，「矩形の格子紋があるもの」「菱形の格子紋に平行線を加へたもの」などがある。

（２）清野謙次氏による調査

1922年（大正11），宇城市松橋町の大野貝塚を調査した清野謙次氏は，その帰途，当時熊本県史蹟調査委員だった古賀精義氏の案内で曽畑貝塚を訪問した際，たまたま貝塚部分の土取作業によって土砂が運び去られている現場に遭遇した。すでに地下げされた場所の断面を精査したところ，「二尺内外」の貝層が見え，すでに土取りした所から人骨が出たと地権者から聞いたことから，地権者と相談し急遽発掘調査の実施を決心したという。

調査は翌年（大正12）３月２日～４日にかけて，清野氏及び宮本博人氏によって実施された。調査の結果，約１尺（約30cm）の厚さの表土の下に厚さ１尺から２尺５寸（約30～76cm）の黒土まじりの貝層があり，この貝層の下部から人骨が出土したという。また，貝層を構成する貝種は，カキ・ハマグリ・サルボウ・アカガイ・ニシ・アカニシなどの海産貝類が主体であったという。

当該調査では，数百点の土器片をはじめ，人骨６体，ハマグリ製（一部にアカガイ製を含む）貝輪50以上・石杵５・石皿１・磨製石斧11・打製石斧４・土製紡錘車など多数の遺物が出土した（清野1924，清野1969）。

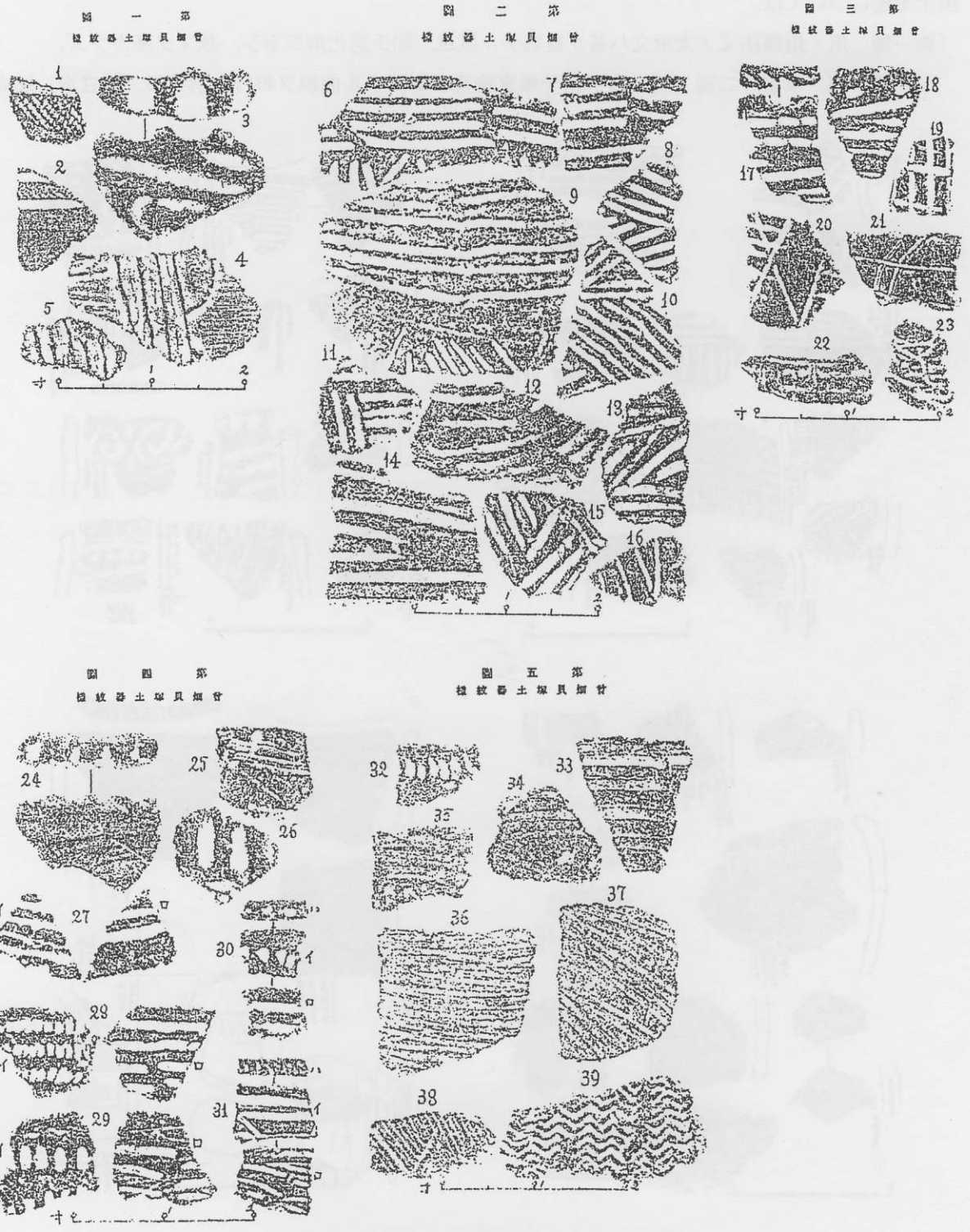
土器については，その８～９割が曽畑式土器を指す「細形刻紋土器」であり，その他は轟式土器や阿高式土器などが出土した。「細形刻紋土器」を構成する文様を，「点線並列紋」，「短直線或は長めの直線の並列紋」，「短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様」，「直線を組合せて重ねた四角形紋様」，「直線を組合せて重ねた菱形紋様」の６類に分類し，これらの組み合わせにより「細形刻紋として特異な印象を生ずる」と記している。

なお，清野本人が述べているとおり，このときの調査は「地層的に深さを定めて土層を順次に上げて行ったのではない」ことから層位学的に十分とはいえないという一面もあるものの（加えて，貝層中出土の馬歯を縄文時代の所産と誤認するなどの問題もあった），曽畑貝塚における本格的な発掘調査の初

例として大きな成果をあげた点で特筆すべき調査である。

このことから，1969年に岩波書店から刊行された『日本貝塚の研究』収録の当該調査報告を付編２において再録した。

第４節　昭和期の調査（第７～12図）



第６図　中山平次郎氏採集遺物（中山1918）

（１）小林久雄氏による調査

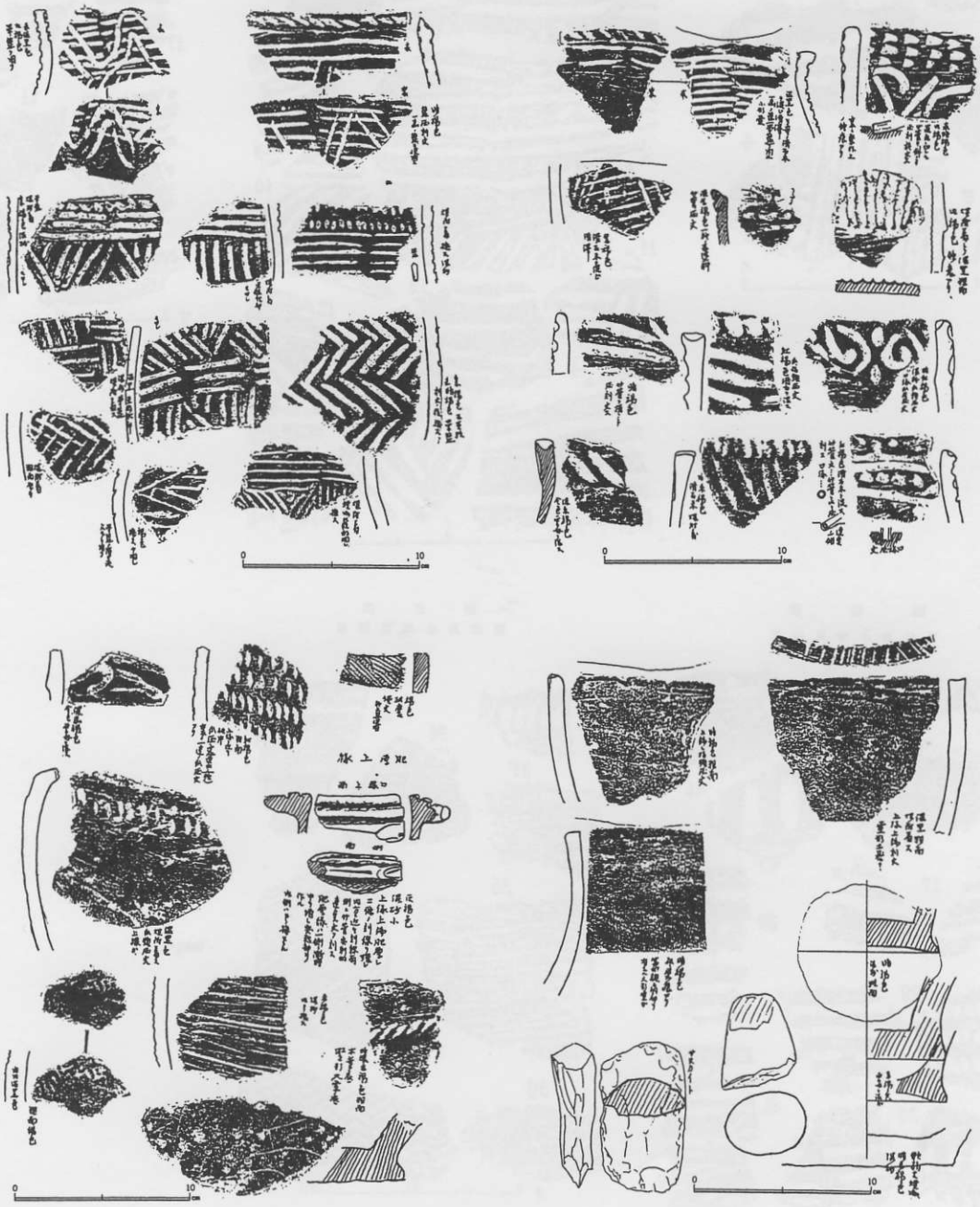
小林久雄氏著『九州縄文土器の研究』（小林1967）の「小林久雄年譜」によれば，1930年（昭和５），10月25日と11月２日に小林氏が曽畑貝塚の発掘調査を実施していることがわかる。この時の成果については次のように記されていたという（坂本1983）。

調査地は「雁回山ノ西麓ガ宇土町東方水田ニ降下接続スル位置ニ残サル」とのみ記されているだけで，具体的な調査地点は不明である。

出土土器については，

「第一類　爪・指頭圧文ノ太形文ハ甚ダ貧弱ナル気風，即チ退化形ヲ示シ，数マタ多カラズ。

第二類　篦，単歯・二歯ノ施文具ヲ以テ単直線及ビ単簡ナル曲線ヲ斜行，羽状形，並立形，連点文



第７図　小林久雄氏発掘調査出土品（坂本1983）

ニ組ミ合ワセテ，幾何学式ノ文様ヲ表ス。滑石ヲ多量ニ混ジテ，裏（口縁ニ限ル）面ニ同様ナル施文ヲ見ルモノアリ。曽畑貝塚ハ第二系ヲ主体トス。

第三類　平行直線間ニ縄文ヲ施セルモノ，研磨精巧ナル一片。

第四類　上縁ニシテ平行線ヲ条刻セルモノ，帯状文ノ一部一片。

第五類　山形ニ組メル籠目文土器一片。底部ニ木葉文ヲ残セルモノアリ，腹片ハ竪形」

とあり，曽畑式土器は第二類に相当するとみられる。曽畑貝塚から出土する土器は，いわゆる「細形刻紋土器」である「第二系（第二類の誤記か）ヲ主体」とする遺跡であることを認識していたことがうかがえる。後年，小林氏はこの「細形刻紋土器」を「曽畑式土器」として型式設定している（小林1935）。

その他の出土遺物については，

「石器　磨製石斧（粘板岩）

猪下顎骨，貝ハカキ・ハマグリ・赤貝・巻貝・シジミ。赤貝ニ穿孔シテ五六十個連繋セリト思ハレルモノ。混乱貝層中ヨリ弥生式・祝部破片混出ス」と記録されている。

小林氏による当該調査の出土品は，現在，熊本市城南町歴史民俗資料館にて「小林コレクション」として収蔵されている。

なお，小林氏は1939年（昭和14）に発表した「九州の縄文土器」（小林1939）で，曽畑式土器の起源について，「阿高式及其類縁土器よりの推移を求むることは困難で，全く他の文化的要素の介入と考へざるを得ない」，「東三洞及牧ノ島瀛仙町貝塚土器と対比すべきもので，其三角組合文及異方向の集束平行線の組合の如き，文様としての類縁を辿る事が出来やう」と指摘した。曽畑式土器の朝鮮半島起源論をはじめて明確に提起した点で重要である（木崎2004）。

（２）江坂輝彌氏を中心とした調査団による調査

1959年（昭和34），江坂輝彌氏を中心とした調査団による発掘調査が実施された。曽畑貝塚を層位的に調査することにより，曽畑式土器文化の時期を特定し，石器，骨角器などの共伴遺物，狩猟採集に伴う自然遺物の分析などを通じて，曽畑式土器文化の実態把握を目的としたものであった。

本書は当該調査に関する再整理報告であり，詳細については後述するが，本貝塚において初めて実施された組織的かつ層位学的な調査であり，大きな成果が得られた。

（３）熊本県教育委員会による調査

①　国道３号線松橋バイパス建設に伴う試掘確認調査

1974年（昭和49）３月，旧建設省九州地方建設局熊本工事事務所は，国道３号松橋バイパス建設計画を発表した。計画路線内における埋蔵文化財の分布確認調査を熊本県教育委員会に依頼したことから，1975年（昭和50）２月５日～３月17日にかけて試掘確認調査が行われた（隈・江本ほか1976）。

調査地点は，これまで貝塚本体があるとされてきた台地の西側約100m付近で，幅約1.5m・長さ約15mの２本のトレンチ（Ａトレンチ・Ｂトレンチ）を掘削したところ，いずれのトレンチからも自然遺物に混じって縄文土器や木製品などの遺物が出土した。また，1959年の調査区西端から約50m西側地点においても試掘確認調査が実施されたが（Ｃトレンチ），ここからは貝類が散在する状況が確認された。

Ａトレンチは部分的に深掘りを実施したため，層序は10層に及んでおり，遺物が認められたのは，ＡトレンチⅣ層，Ⅷ層，Ⅸ層であった。

Ⅳ層（赤褐色粘質土層）では，Ⅴ層と接する部分に弥生式土器と思われる細片が出土した。Ⅷ層（青褐色砂礫層）は，湧水が著しく砂および小石が多く，曽畑式土器や出水式土器，加工痕が認められる木片などが出土した。Ⅸ層（泥炭層）は黒褐色の砂が主で，小石が混じり角閃石が多く，曽畑式土器や加工痕がある木片や網代などが出土した。このことから，Ⅳ層を第Ⅰ文化層，Ⅷ層を第Ⅱ文化層，Ⅸ層を第Ⅲ文化層に比定している。

Ｂトレンチでは６層が確認され，このうちⅥ層（砂礫層）の上部は赤褐色，下部は淡青褐色を呈しており，縄文時代後期とみられる土器が出土した。本層はＡトレンチ第Ⅷ層と同一層に比定されている。

つまり，この調査では縄文時代の文化層が２面存在することが確認され，出土遺物から上層は中～後期，下層が前期に属する可能性が高いことが判明した。

②　国道３号線松橋バイパス建設に伴う本調査

前掲の試掘確認調査結果に基づき，曽畑貝塚低湿地遺跡として1986年（昭和61）９月～1987年６月にかけ，熊本県教育委員会文化課によって記録保存を目的とした本調査が実施された（江本編1988）。

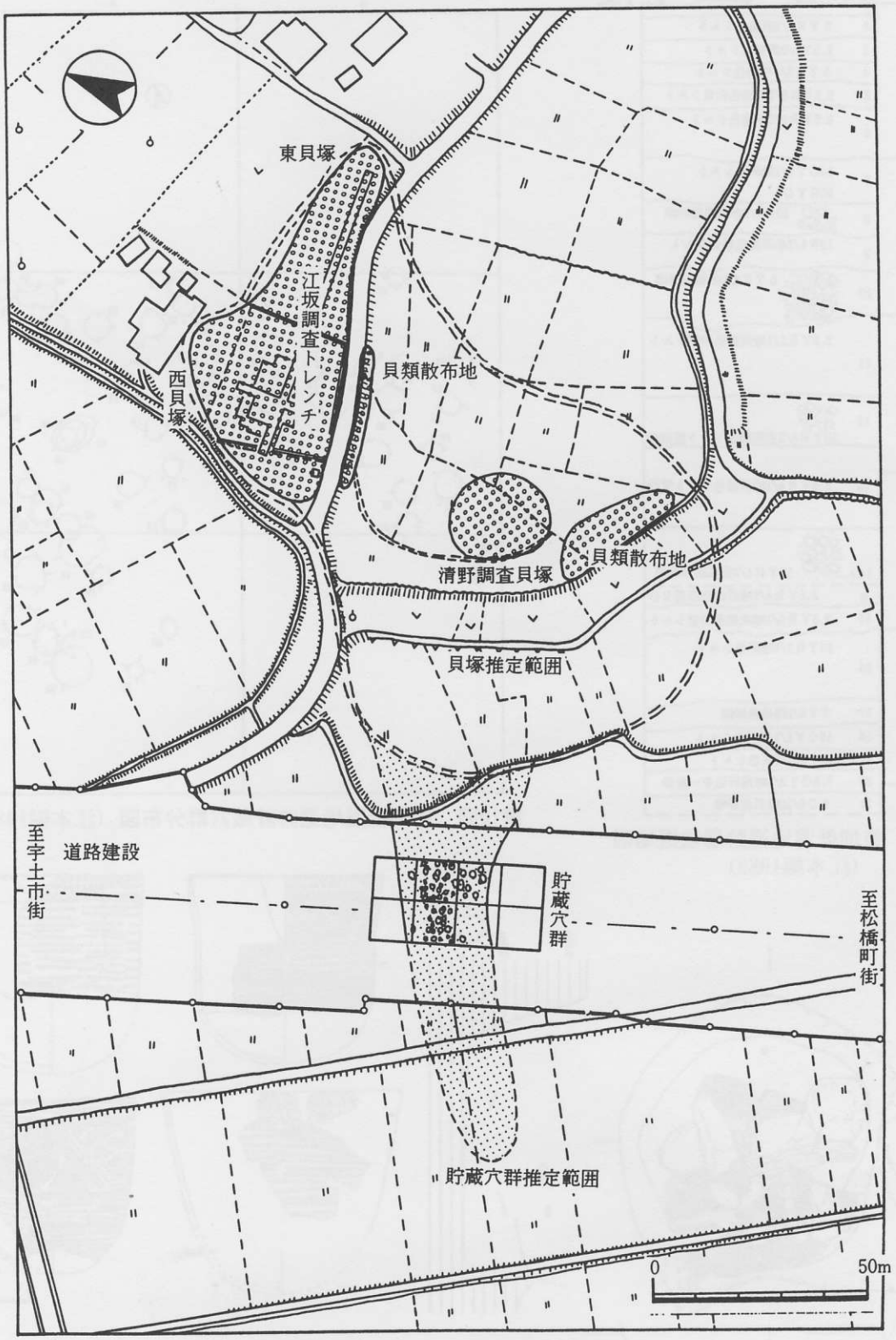
調査区は前掲Ａトレンチを含む形で，計画路線内の20m×40m＝800㎡の範囲で設定され，層序は21層に及び，地表面から約5.2mの深さまで発掘されたが，16層以下の層では無遺物層であった。つまり，遺物が出土したのは15層以上である。また，９層から上層は弥生時代以降の堆積層であり，縄文時代の遺物を含むのは10～15層であった。

各層の概要を以下に示すと，10層（灰褐色砂礫層，地表下約1.7～2.0m）では，阿高式土器や南福寺式土器，御領式土器，古閑式土器など中期から晩期までの縄文土器が出土し，貯蔵穴群５基を検出した。11層（暗灰褐色砂質シルト層，地表下約2.0～2.5m）は前期の曽畑期に形成された土層であり，57基の貯蔵穴群が検出され，曽畑式土器や石鏃，磨製石斧などの石器，獣骨などの動物遺存体が出土した。12～15層（12層：黄灰褐色シルト混砂礫層，13層：暗灰褐色シルト質砂層，14ａ層：黄灰褐色砂礫層，14ｂ層：暗灰褐色礫混り砂層，15層：暗灰褐色砂質シルト層，地表下約2.5～4.5m）は前期の轟式土器の包含層である。

上述した貯蔵穴群中からは，イチイガシを主体とするドングリ類やこれらを貯蔵穴に貯える際に入れた網代，ヒョウタンなど，低湿地の調査であったため通常残り難い植物質の製品や植物遺存体が出土したことは大きな成果であった。これらの貯蔵穴群から出土したドングリ類や網代は，保存処理が施され展示会などで公開・活用されている。

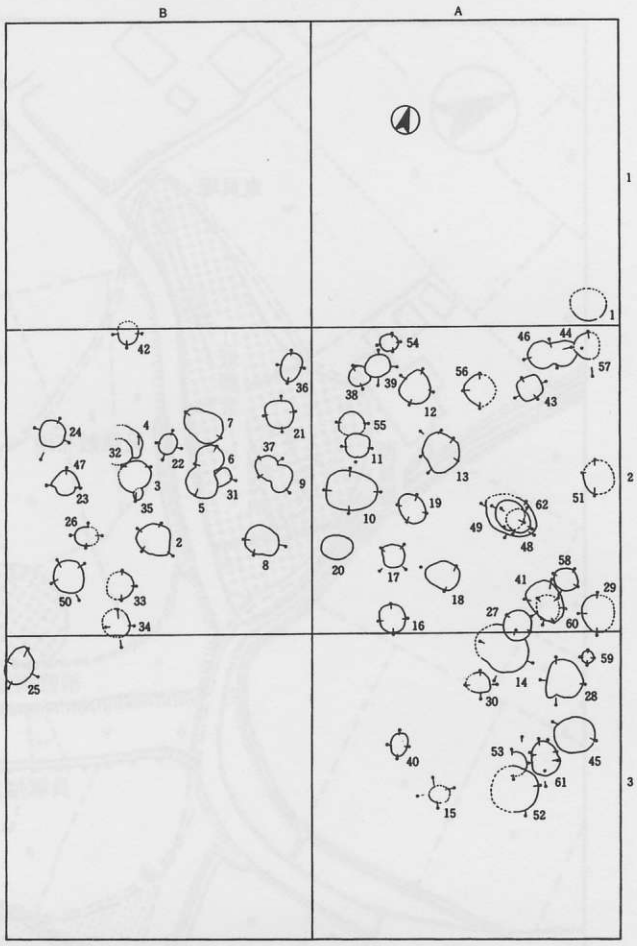
また，当該調査では縄文時代当時の曽畑貝塚周辺における自然環境や地形環境などを総合的に理解するため，出土した植物種子や動物遺存体の同定，花粉分析や珪藻分析，放射性炭素年代測定などの自然科学分析が行われ，大きな成果が得られた。

同定された植物種子は20種類，16科19属であり，うち木本は11種類でカジノキ，ヤマグワ，マタタビ，などの食利用可能な植物であり，草本は９種類で，そのうち６種は畑地雑草であった。検出された植物遺体の多くは，今日でもその「木の実」が食利用されるものであったことが判明している（藤沢1988）。また，花粉分析の結果から，縄文時代前期は遺跡周辺の丘陵地一帯にはイチイガシを優先種とするカシ型の照葉樹林が旺盛に繁茂したと推定されている（畑中1988）。さらに，珪藻分析から，轟期は海水の影響が強く，海水が遺跡の近くまで入りこんでいたとみられるが，続く曽畑期では，海に近い場所であったと想定されるものの，轟期よりも海水の影響は薄まることが判明している（海津1988）。

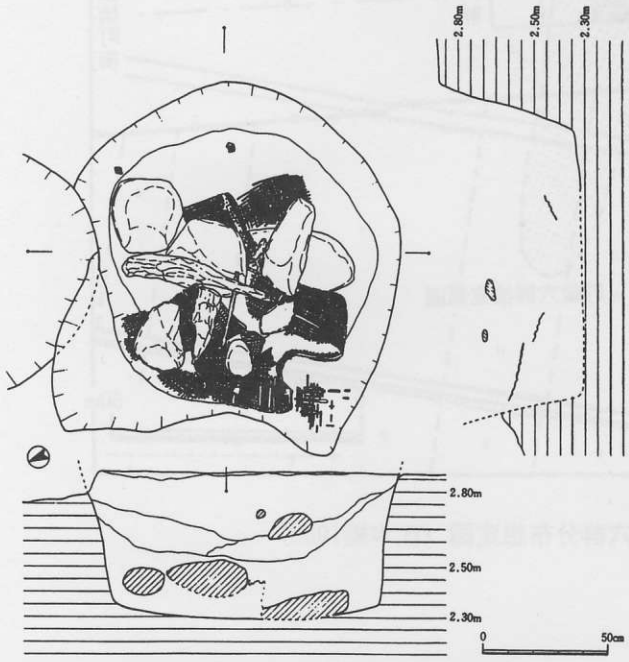


第８図　曽畑貝塚・貯蔵穴群分布想定図（江本編1988）

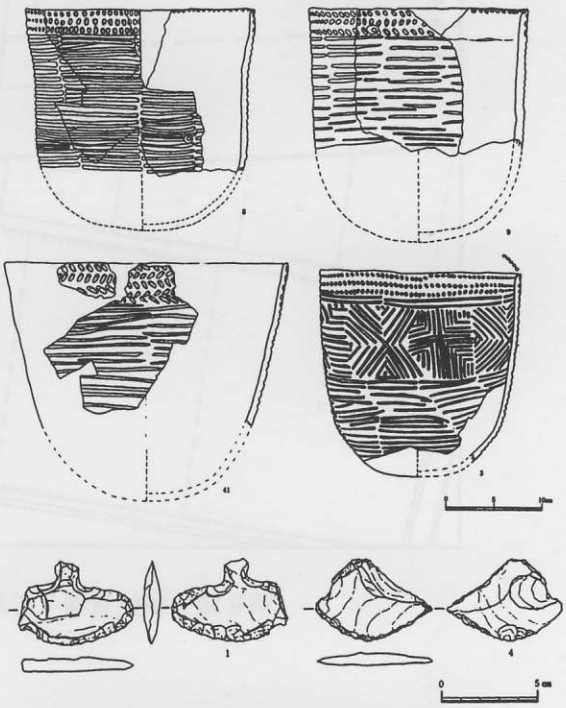
第９図　曽畑低湿地遺跡層位概略図
（江本編1988）



第10図　曽畑低湿地遺跡貯蔵穴群分布図（江本編1988）



第11図　曽畑低湿地遺跡第14号貯蔵穴（江本編1988）



第12図　曽畑低湿地遺跡出土曽畑式土器
及び石器（江本編1988）

本調査において出土した曽畑式土器（11号貯蔵穴内出土，第12図右下の土器）については，付着した炭化物の年代測定が県立装飾古墳館によって実施されており，補正年 BP5240±40という結果が得られている（古環境研究所2007）。

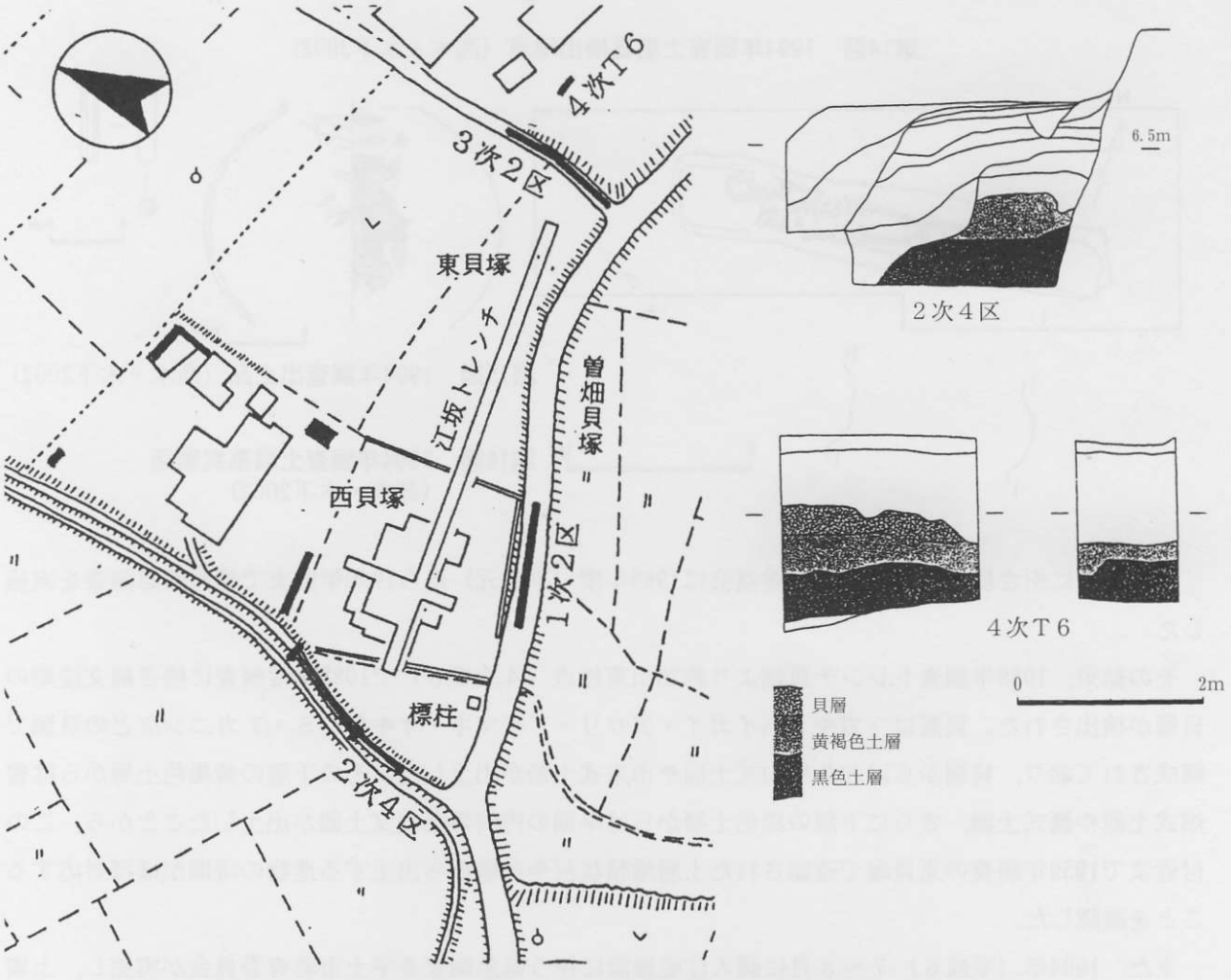
（４）宇土市教育委員会による調査（第13図）

宇土市教育委員会により1986・1987年度（昭和61・62）に下水道工事に伴う緊急発掘調査（１・２次調査），1988年度（昭和63）から1990年度（平成２）には国庫補助金を得て貝塚の範囲確認調査（３～５次調査）を実施した。

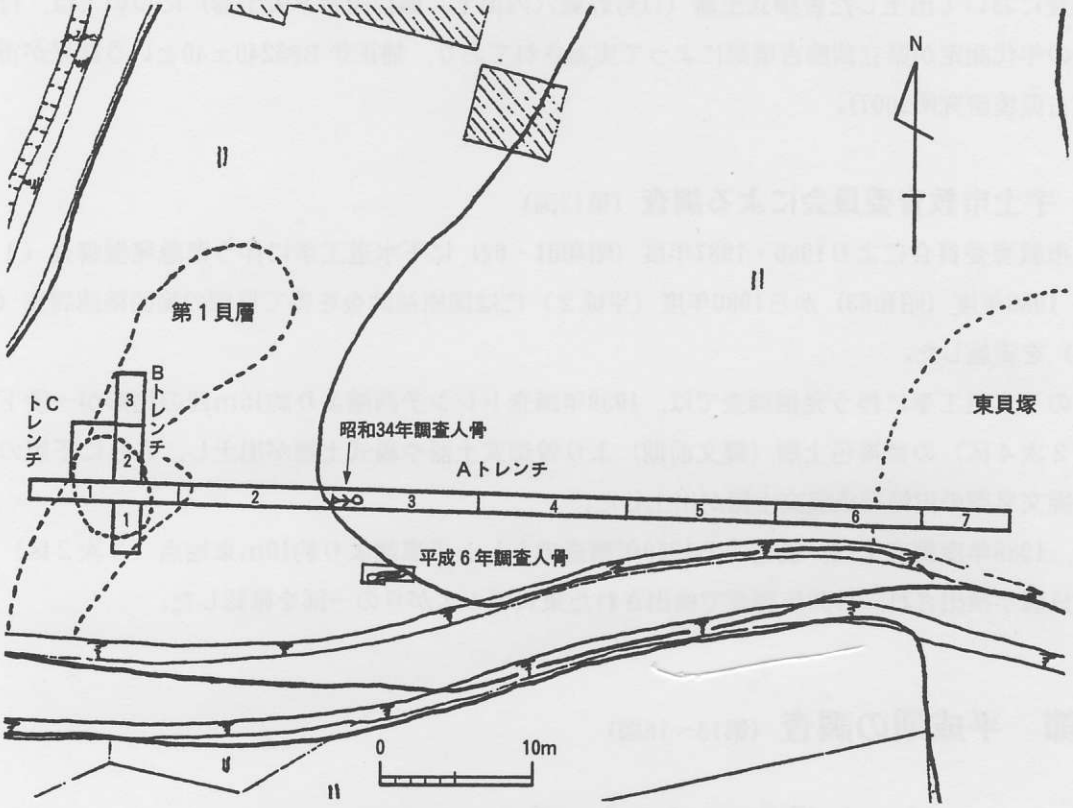
上記の下水道工事に伴う発掘調査では，1959年調査トレンチ西端より約15m西の地形が一段下がった地点（２次４区）の黄褐色土層（縄文前期）より曽畑式土器や轟式土器が出土し，さらに下層の黒色土層より縄文早期の円筒形条痕文土器が出土した。

また，1988年度調査では，後述する1959年調査のトレンチ東端より約10m東地点（３次２区）で縄文後期の貝層が検出され，1959年調査で検出された東貝塚の広がりの一部を確認した。

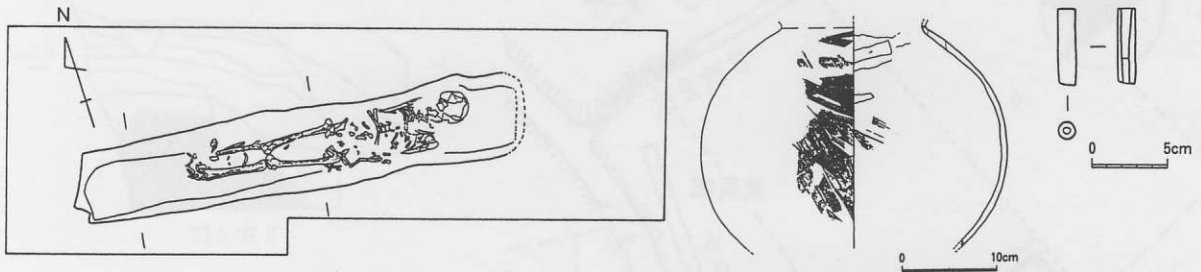
第５節　平成期の調査（第13～16図）



第13図　下水道工事及び範囲確認調査事業に伴う発掘調査（木下1990を改変）



第14図　1994年調査土壙墓検出地点（高木・木下2002）



第15図　1994年調査出土品（高木・木下2002）

第16図　1994年調査土壙墓実測図
（高木・木下2002）

1988年度に引き続き，宇土市教育委員会は1989年度（平成元）から1990年度まで範囲確認調査を実施した。

その結果，1959年調査トレンチ東端より約20m東地点（４次Ｔ６）で1988年度調査に続き縄文後期の貝層が検出された。貝層はマガキ・ハイガイ・アサリ・アゲマキ・オキシジミ・アカニシなどの貝類で構成されており，貝層からは北久根山式土器や市来式土器が出土した。その下層の黄褐色土層からは曽畑式土器や轟式土器，さらに下層の黒色土層からは早期の円筒形条痕文土器が出土したことから，この付近まで1959年調査の東貝塚で確認された土層堆積状況や各層から出土する遺物の時期がほぼ対応することを確認した。

また，1994年（平成６）７～８月に個人住宅建設に伴う緊急調査を宇土市教育委員会が実施し，土壙墓１基を検出した。墓坑はかなり狭く，遺体との隙間はほとんどなかった。墓坑内からは胸部付近を中

心に赤色顔料の散布が見られた20～30代前半の女性人骨が１体検出され，左下顎骨付近から碧玉製管玉が１点，下肢骨付近から刀子片が出土したのみで，細かい時期の特定はできなかったものの，付近から出土した土師器からおおむね古墳時代前期～中期の所産であることが確認された。

上述した人骨の出土状況や土壙墓の形状などが，慶応大学調査における人骨の出土状況と酷似することから，1959年調査当時，縄文時代とされた人骨についても同様に古墳時代の所産と想定されている（高木・木下2002）。

引用・参考文献

海津　正倫　1988「曽畑貝塚付近における地形環境の変遷」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

江本直　編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

木﨑　康弘　2004『豊饒の海の縄文文化・曽畑貝塚』シリーズ「遺跡を学ぶ」007　新泉社

木下　洋介　1990「宇土市曽畑貝塚の範囲確認調査」肥後考古学会第197回例会発表資料

清野　謙次　1924「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」『歴史地理』43-2

清野　謙次　1969「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」『日本貝塚の研究』　岩波書店

古環境研究所　2007「曽畑遺跡出土曽畑式土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』７　熊本県立装飾古墳館

小林　久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』１－２　東京考古学会

小林　久雄　1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11　雄山閣

小林　久雄　1967『九州縄文土器の研究』　小林久雄先生遺稿刊行会

隈昭志・江本直ほか　1976『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告第19集　熊本県教育委員会

坂本　経堯　1983「曽畑貝塚」『肥後上代文化資料集成』　肥後上代文化研究会

髙木恭二・木下洋介　2002「曽畑遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

寺石　正路　1890「九州ノ貝塚」『東京人類学雑誌』５－53　東京人類学会

中山平次郎　1918「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」『考古学雑誌』８－５　考古学会

畑中　健一　1988「曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉学的研究」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

藤沢　　浅　1988「曽畑貝塚低湿地遺跡出土の植物種子の同定」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

若林　勝邦　1890ａ「肥後旅行談」『東京人類学雑誌』５－49　東京人類学会

若林　勝邦　1890ｂ「肥後ニオケル石器時代ノ遺跡調査報告」『東洋学芸雑誌』　東洋學藝社

第４章　調査の概要

第１節　調査の方法（第17図）

1959年（昭和34）10月28日から11月６日の計10日にわたり，江坂氏を中心とする調査団は曽畑貝塚が所在する舌状台地末端部（標高約８m）の耕作地で発掘調査を実施した。調査地の地番は宇土市岩古曽町字曽畑1196-1，1197-1，1198-1，1198-3である。調査地より南へ約50mの地点には，清野氏調査地（1923年調査）が所在する。

本調査では，東西方向に１～７区（１～６区：約10m，７区：約６m）からなるＡトレンチ，Ａトレンチ１区中央東よりに南北方向の１～３区から構成されるＢトレンチ，さらにＢトレンチ２区を西に拡張したＣトレンチを設定した（第17図）。各トレンチの規模は，Ａトレンチが長さ約66m・幅約1.5m・面積約99㎡，Ｂトレンチが長さ約12m（Ａトレンチとの重複部分含む）・幅約２m・面積約24㎡，Ｃトレンチは長さ約3.5m・幅約2.5m・面積約９㎡で，Ａ～Ｃトレンチの合計面積は約132㎡である。

まず，Ａトレンチから発掘調査を開始し，層序と出土遺物との関係を把握しながら調査が進められ，調査の進行にともなってＢトレンチとＣトレンチを設定，調査が実施された。また，並行して調査地周辺の地形測量（１mコンター）や土層断面図の作成（縮尺１/10），写真撮影（35㎜カラーリバーサル，35㎜モノクロ）などが行われた。各トレンチにおいて表土から基盤層までの土層堆積状況を把握することが努められたが，一部に調査期間の関係から未掘となった部分もある。しかしながら，おおむね当該調査地点の土層堆積状況が明らかとなった。

続いて，各トレンチの概要についてふれるが，付編１－２「発掘経過」（渡辺・可児）において各トレンチの層序や出土遺物などに関する具体的な報告を掲載していることから，次節では当該報告を要約するにとどめたい。

第２節　各トレンチの概要

（１）Ａトレンチ（第18～20図）

調査の結果，１区から２区西側において曽畑式土器を包含する貝層（第２貝層）が検出されるとともに，間に礫層をはさみ，その上層においても縄文時代後期の土器を包含する貝層（第１貝層）が検出され，時期が異なる縄文時代の貝層の重複が明らかになった。また，６区から７区においても前述の貝層とは異なる縄文時代後期の貝層が確認されたため，調査団は前者を「西貝塚」，後者を「東貝塚」と仮称し，区別した。

Ａトレンチにおける層序は，土層堆積状況より大きく分けて１区から２区西側，２区中央部から５区，６区から７区で違いがある。

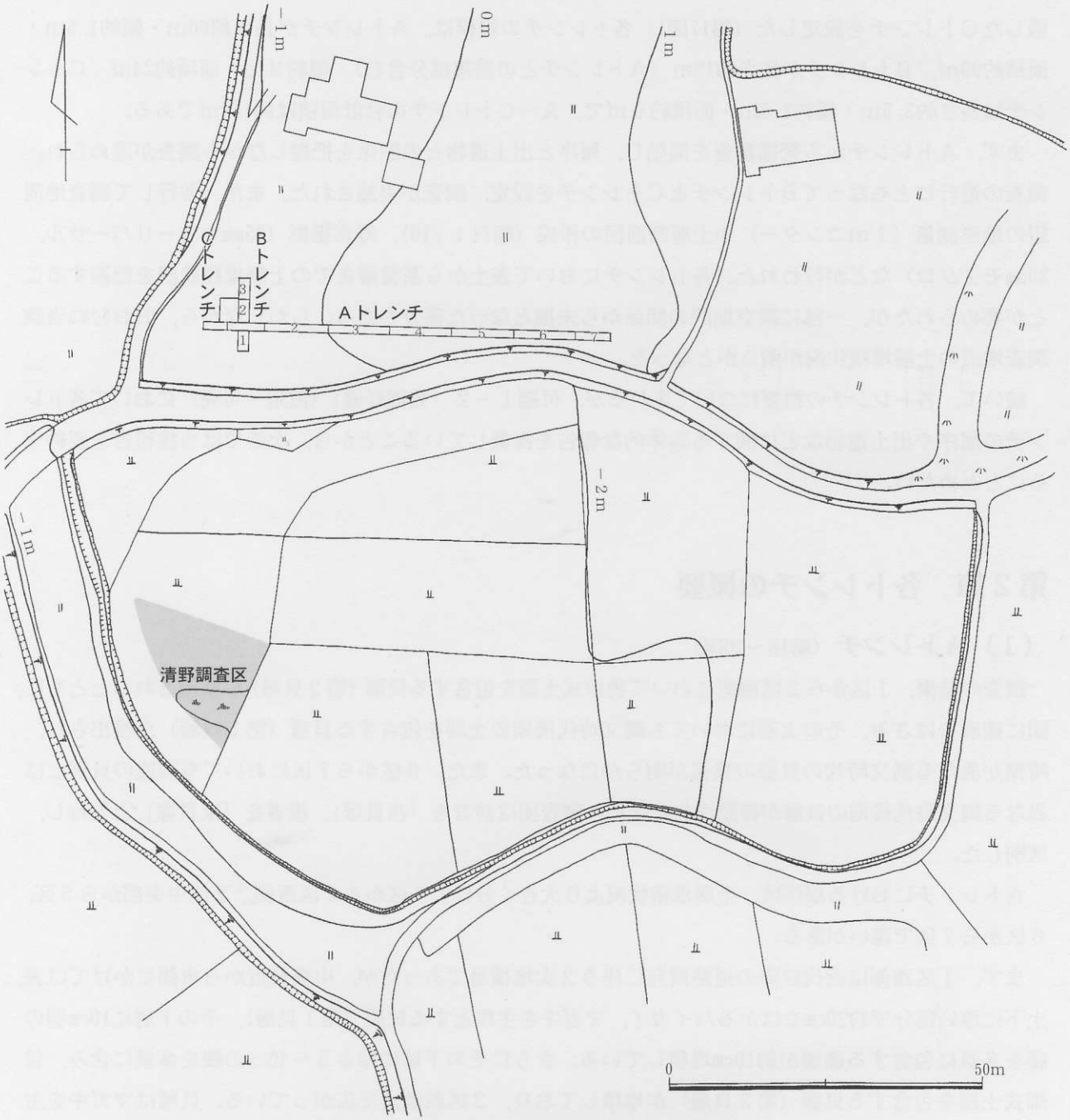
まず，１区西側は近代以降の道路開発に伴う２次堆積層であったが，中央付近から東側にかけては表土下に厚い部分で約20cmをはかるハイガイ，マガキを主体とする貝層（第１貝層），その下層に10cm弱の礫を多量に包含する礫層が約10cm堆積している。さらにその下層に厚さ５～40cmの礫を多量に含み，曽畑式土器を包含する貝層（第２貝層）が堆積しており，２区西端まで広がっている。貝種はマガキを主体とし，ハイガイやカガミガイがやや多い。第２貝層下層は，厚さ約40～60cmの褐色土層が堆積してお

り，褐色土層以下は基盤層である。

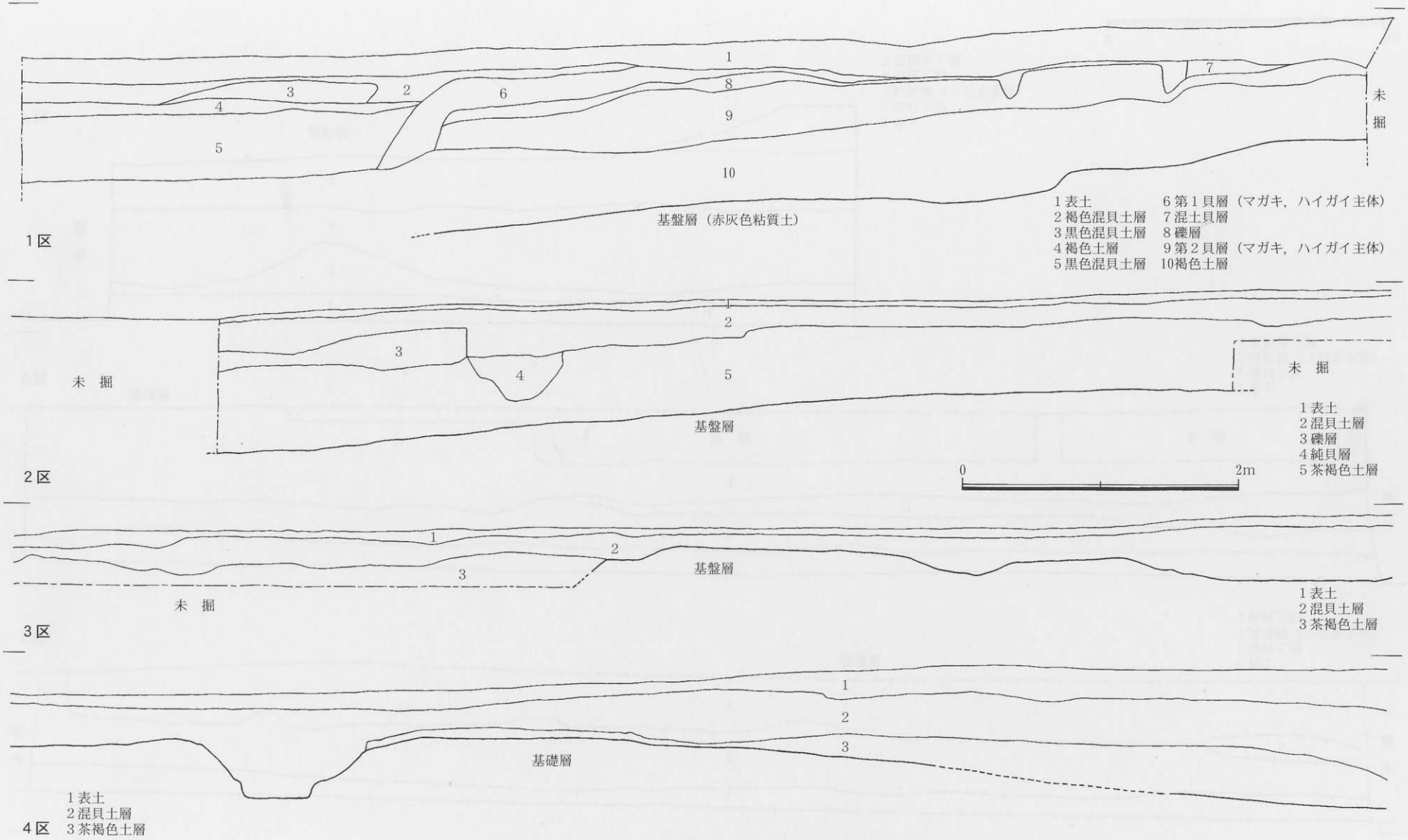
なお，曽畑式土器を包含するのは第２貝層だけでなく，下層の褐色土層上部（約10cm）までおよび，その下部からは微隆起帯文や貝殻条痕文土器などを施す轟式土器や押型文土器が出土した。

次に２区中央付近から５区では，表土下に二次的に破壊された厚さ約10～40cmの混貝土層，その下層に厚さ約10～50cmの茶褐色土層の順に堆積しており，３区では土壙墓，５区東端ではマガキを主体とする厚さ20cm程のごく小規模な貝層が確認された。混貝土層からは，須恵器や土師器，青磁が出土しており，中世以降に形成された堆積層とみられる。混貝土層下層の茶褐色土層からは，曽畑式土器や轟式土器，押型文土器が出土しており，１区における褐色土層と対応する可能性が高い。

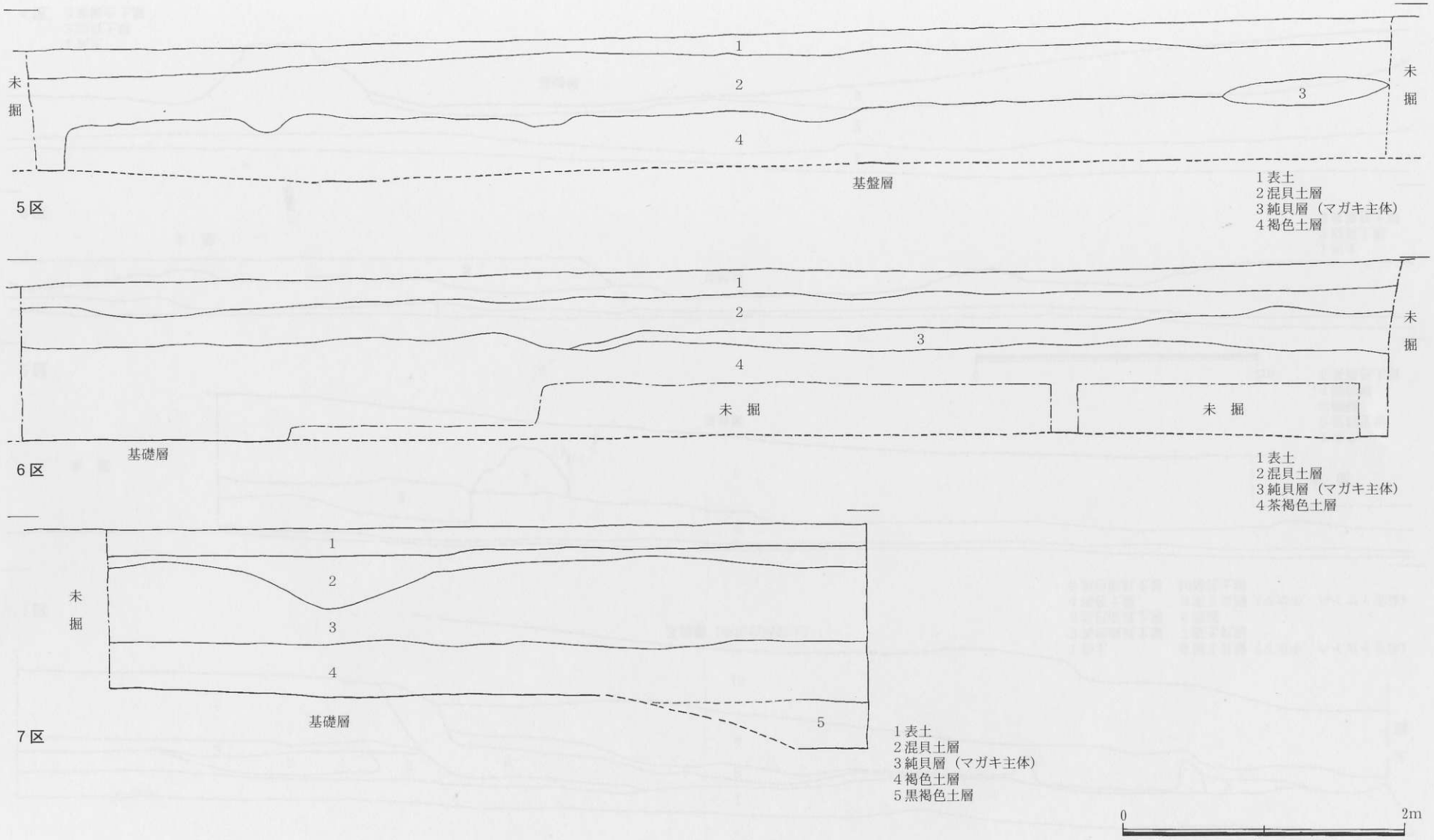
最後に６・７区においては，混貝土層下にＡ１区で検出された第１貝層や第２貝層とは異なる縄文時



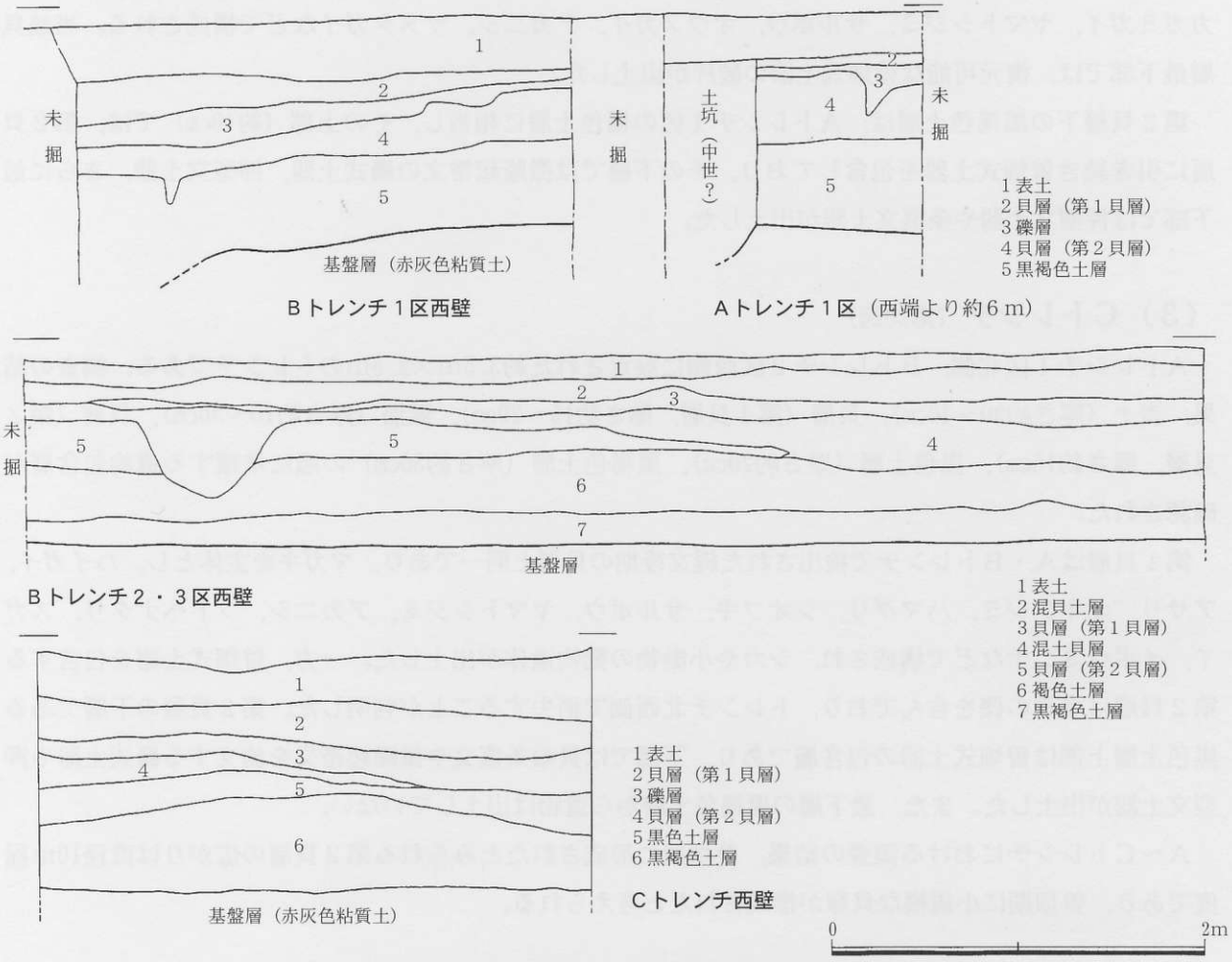
第17図　調査トレンチ配置図（1/1,000）



第18図　Aトレンチ1～4区北壁土層断面図（1/40）



第19図　Aトレンチ5～7区北壁土層断面図（1/40）



第20図　Ａ～Ｃトレンチ土層断面図（1/40）

代後期のマガキを主体とする厚さ約10～70cmの貝層が確認された。マガキ以外にはイワガキ，ハイガイ，マテガイ，ハマグリ，アサリ，シオフキ，オオノガイ，ウネナシトマヤガイなどの二枚貝，アカニシ，テングニシ，イボニシ，フトヘナタリ，イボウミニナ，スガイなどの巻貝がある。また，当該貝層はボーリングや試掘の結果，６・７区の北側や東側に広がることが判明し，南側の道路に面した法面にも露出していることから，直径20m程度の広がりをもつ貝層と想定され，最も厚い部分で約70cmをはかる。

貝層下の褐色土層（厚さ約60cm）上部からは，曽畑式土器や轟式土器，褐色土層下部からは横位の貝殻条痕文を施す轟式土器や山形押型文土器などが出土した。

（２）Ｂトレンチ（第20図）

Ａトレンチ１区から２区西側にかけて検出された西貝塚の規模を確認するために設定されたトレンチであり，３区に分けられる。Ａトレンチ１区南側に設定されたＢトレンチ１区（幅約２m，長さ約3.5m）では，Ａトレンチ１区とほぼ同様の層序であることが確認された。

このうち，Ｂトレンチ１区では，表土（厚さ30cm），貝層（第１貝層，厚さ約５～25cm），礫層（厚さ約10cm），貝層（第２貝層，厚さ約15～30cm），黒褐色土層（厚さ50cm以上）の順に堆積する遺物包含層が確認された。縄文後期の土器を包含する第１貝層ではマガキを主体とし，南へ下降しながら厚みを増

すことが確認された。一方，第２貝層もマガキを主体とし，その他にハイガイ，ハマグリ，マテガイ，カガミガイ，ヤマトシジミ，サルボウ，オウノガイ，アカニシ，ツメタガイなどで構成される。当該貝層最下部では，復元可能な曽畑式土器の破片が出土した。

第２貝層下の黒褐色土層は，Ａトレンチ１区の褐色土層に相当し，その上部（約10cm）では，第２貝層に引き続き曽畑式土器を包含しており，その下層では微隆起帯文の轟式土器，押型文土器，さらに最下部では押型文土器や条痕文土器が出土した。

（３）Ｃトレンチ（第20図）

Ａトレンチ１区北側，Ｂトレンチ２区西側に設定された約3.5m×2.5mのトレンチである。調査の結果，表土（厚さ約20～40cm），貝層（第１貝層，厚さ約15～20cm），礫層（厚さ約10～30cm），貝層（第２貝層，厚さ約15cm），黒色土層（厚さ約20cm），黒褐色土層（厚さ約30cm）の順に堆積する遺物包含層が確認された。

第１貝層はＡ・Ｂトレンチで検出された縄文後期の貝層と同一であり，マガキを主体とし，ハイガイ，アサリ，オキシジミ，ハマグリ，シオフキ，サルボウ，ヤマトシジミ，アカニシ，フトヘナタリ，スガイ，イボウミニナなどで構成され，シカや小動物の動物遺体が出土した。一方，曽畑式土器を包含する第２貝層は多量の礫を含んでおり，トレンチ北西側で消失することが判明した。第２貝層の下層である黒色土層上部は曽畑式土器の包含層であり，下部では貝殻条痕文や微隆起帯文を施文する轟式土器や押型文土器が出土した。また，最下層の黒褐色土層から遺物は出土していない。

Ａ～Ｃトレンチにおける調査の結果，曽畑期に形成されたとみられる第２貝層の広がりは直径10m程度であり，曽畑期に小規模な貝塚が形成されたと考えられる。

第３節　調査日誌抄

1959年（昭和34）10月28日

地権者へ挨拶。トレンチ設定。東西約66m，幅約1.5mのＡトレンチを設定。

10月29日

Ａトレンチ１～３区より調査開始。２区の貝層（地表下約31～40cm）及び貝層下褐色土層（地表下約41～58cm）で曽畑式土器出土。３区の地表下約35cm付近では土壙墓を検出，伸展葬の人骨が出土したことから，これらの実測図（平面図）を作成。小林久雄氏，熊本大学法文学部松本雅明氏ら来訪。

10月30日

Ａトレンチ１～３区に加え，新たにＡトレンチ６区の調査開始。Ａトレンチ１区の貝層（第２貝層，地表下約60cm）より遺存状態のよい曽畑式土器が出土。地表下約30～60cmで，マガキ，ハイガイ，スガイ，カガミガイなどを含む純貝層を検出。２区の地表下約40～60cmの礫層中では，曽畑式土器とともに黒曜石などの剥片が数多く出土。３区で検出した土壙墓の断面図作成。６区では，マガキが大半を占める純貝層より縄文後期の土器が出土。富樫卯三郎氏ら来訪。

10月31日

新たにＡトレンチ４・５・７区の調査開始。Ａトレンチ１区で曽畑式土器を単純に包含する純貝層（第２貝層）検出（地表下約50cm）。本貝層と貝層下土層（褐色土層）の境界付近で曽畑式土器が多量に出土。３区西半部の混土貝層（地表下約20～45cm）より，土師器・須恵器・青磁が出土。４区では，地表下15cm程より下部は基盤層まで混土貝層で，土師器や須恵器出土。５区貝層下褐色土層で轟式土器出土。６区東側はマガキが多い純貝層で，鐘崎式土器や獣骨が出土。宇土小学校６年生（約250名），

平岡勝昭氏ら来訪。

11月１日

Ａトレンチ１区南側に直交するＢトレンチ１区（長さ約3.5m，幅約２m）を設定し，調査開始。Ａトレンチ５区の貝層下褐色土層より押型文土器出土。６区貝層下土層より轟式土器出土。７区の純貝層より鐘崎式土器が出土したことから当該貝層が縄文後期の貝層であることが判明。宇土市長大和忠三氏，鶴田倉造氏ら来訪。

11月２日

Ｂトレンチ１区より北側にＢトレンチ２区・３区を設定し，調査開始。Ａトレンチ５区貝層より縄文後期の土器，貝層下土層上部より押型文，轟式土器出土。同７区でマガキが多い貝層より炭化物を採集。Ｂトレンチ１・２区の貝層（第１貝層）で鐘崎式，市来式などの縄文後期の土器が出土。第１貝層下層の貝層（第２貝層）で曽畑式土器，獣骨出土。花園小学校校長及び職員，松橋警察署長，熊本市立博物館牛島盛光氏ら来訪。

11月３日

調査地周辺の地形測量を実施。Ａトレンチ５区のマガキを主体とする純貝層（厚さ約20cm）で，縄文後期の土器出土。貝層下土層（褐色土層）では条痕文土器が出土。Ａトレンチ７区貝層中よりフグ下顎，アワビ貝製垂飾品出土。Ｂトレンチでは，１～３区の第２貝層直下から貝層下土層（褐色土層）にかけて曽畑式土器の大型破片が数多く出土し，褐色土層上部付近でも曽畑式土器が出土。玉名高等学校田辺哲夫氏，肥後考古学会三島格氏ら来訪。

11月４日

Ｃトレンチの発掘開始。Ａトレンチ５区の貝層下土層中の条痕文土器や押型文土器，曽畑式土器の取り上げ終了。同６区中央部の混貝土層より縄文後期の磨消縄文土器，茶褐色土層より轟式や曽畑式土器が出土。Ａトレンチ北壁断面図作成。Ｂトレンチ１区貝層下褐色土層より押型文土器片出土。Ｂトレンチ３区貝層下褐色土層より押型文土器出土。Ｃトレンチ第１貝層では，骨製尖頭器，縄文後期の土器出土。熊本県教育次長鈴木知男氏，宇土市教育委員長金森盛起氏ら来訪。

11月５日

Ａトレンチ７区貝層下褐色土層上部より条痕文土器，同層下半から黒褐色土層上面より山形押型文土器出土。Ｂトレンチ検出の第２貝層は１区東南部で消滅することが判明。同２区褐色土層（地表下約90～100cm）より押型文土器出土。

Ｂトレンチ１・２区とＡトレンチ１区の第２貝層で微細魚骨を採集。イナダ，マイワシ，クロダイなど数種類を同定。Ｃトレンチ第１貝層で縄文後期の磨消縄文土器が多数出土。調査地周辺の地形測量を実施。Ａトレンチ２～４区北壁・同２区南北壁・同７区北壁，Ｂトレンチ１～３区西壁の土層断面図を作成。Ａ・Ｂトレンチ調査終了箇所の埋め戻し作業開始。小林久雄氏，山鹿高等学校原口長之氏ら来訪。

11月６日

Ｃトレンチ第２貝層最下部から貝層下黒色土層直上にて曽畑式土器の大型破片出土。貝層下の土層上部からも曽畑式土器が出土し，その下部では条痕文土器や細隆起線文土器，押型文土器が出土。全トレンチの埋め戻し作業完了。

第５章　検出遺構

第１節　検出遺構の概要（第21図）

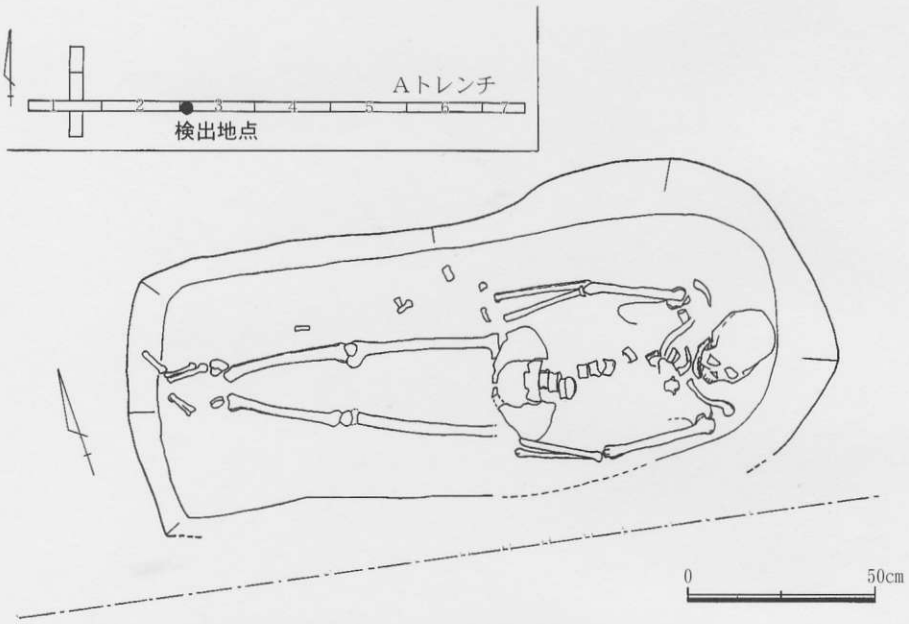
本調査で検出された遺構は，土壙墓１基のみである。

検出地点はＡトレンチ３区西側で，茶褐色土層上面において検出された。主軸を西北西－東南東方向にとり，検出規模は長径約188cm，短径約90cmあまり，検出面からの深さは約24cmである。調査日誌によれば，埋土に腐植土が堆積していたと記されている。土壙墓底部より頭部を東に向けた仰臥伸展葬の熟年男性人骨が１体出土した。

なお，第３章第５節で示したように，1994年に宇土市教育委員会が実施した発掘調査で，当該土壙墓から約５ｍ南側で土壙墓１基を検出した。墓坑内からは胸部付近を中心に赤色顔料の散布が見られた20～30代前半の仰臥伸展葬の女性人骨が１体出土し，付近から出土した土師器からおおむね古墳時代前期～中期の所産であることが確認された。この２つの土壙墓と人骨の出土状況が酷似することから，現在では，慶応大学調査で出土した人骨についても同様に古墳時代の所産と想定されている。

第２節　出土人骨について

当該人骨の特徴については，付編１－３の小片報告を参照。



第21図　Ａトレンチ３区検出土壙墓（1/20）